hacchi

2016.4-2021.3

DASHIJIN BOOK

はっちプロジェクト

DASHIJIN

発行　2021 月3月

制作　八戸ポータルミュージアム はっち

令和 2 年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

文化庁

beyond 2020

はっちプロジェクト DASHIJIN 年表

2016

■公民館・町内会への働きかけ

■「はちのへスケェターず」の
取材・執筆活動

■「八戸 88 ストーリーズ」編纂

■住中浩史 × 山車組 × 縦糸横糸合同会社
山車組訪問とリサーチ活動
2016.6 月 - 8 月

2017

■「八戸 88 ストーリーズ」展覧会
2017.4 月 - 5 月

■住中浩史 × 山車組
「山車づくり応援企画実験室」
2017.5 月 - 9 月

■「八戸 88 ストーリーズ」発行
2017.10 月

■縦糸横糸合同会社 × 山車組
子どもたちによる山車小屋訪問と番組作り
「8.3 チャンネル」2017.7 月 - 8 月

■8.3 チャンネル＋山車づくり応援企画実験室
DASHIJIN 写真・映像展
2017.9 月 - 10 月

2018

■縦糸横糸合同会社 × 吉川由美
教育プログラム・教材映像制作
と市内小学校でのトライアル授業
2018.9 月 - 11 月

■プロジェクト記録映像制作
「教育プログラムトライアル授業」
「DASHIJIN LAND」

■市民 × 山車組 ×KOSUGE1-16× 演劇人
「DASHIJIN LAND」
2019.2 月
市民ワークショップ
2019.1 月 - 2 月
DASHIJIN トーク　2019.2 月

2019

■山車組ツアー・ワークショップ
「DASHIJIN なりきりツアー」
2019.6 月 - 7 月

■市民 × 山車組 ×KOSUGE1-16
「八戸三社大祭スモールワールド」
制作と運営
※新型コロナ非常事態宣言により中止

2020

■山車組 ×KOSUGE1-16× 大澤未来
山車飾り造形制作の
プロセス・サンプル教材と教材映像
の制作

■山車組 ×KOSUGE1-16× 大澤未来 × 吉川由美
小学校教育プログラム制作と
上記のための指導用ハンドブックの制作

■教材と教育プログラムの展示説明会
2020.12 月

はっち と はっちプロジェクト DASHIJIN

出かけたくなるまちには、新しい出会いがある。
未知の『こと』、『人』と出会う場。
知っている、わかっていると当たり前に思いこんでいたことに
改めて新たな発見ができる場。
認め合いながら、共に創り、語る場。
そんな場がある『まち』には、世代を超えて市民が集う。
そんな場がある『まち』は
持続・成長するエネルギーを決して失わない。
そして伝統は、あらゆる人々がクロスする開かれた場でこそ
つむがれていく。

DASHIJINは、そんな場をまちに出現させ、
『まち』を動かす底力を生み出していく
コミュニティプロジェクト。

はっちを拠点に、世代を超えて市民が集い、
八戸三社大祭にまつわる人々の営みに
文化的価値を探り出していく。
そして、山車作りの場のような創造活動を通して
多様な人々が交流する場を持続的に展開する。
祭りを支える市民の多様な力、技、知恵、美意識に着目しながら、
アーティストたちの力を借りて、
参加することでこの祭の本質的な価値を体感する場を創り出す。

市民 × 山車組 × アーティストの共創が
祭を支える人と人とのつながりを可視化し、
次代につないでいく力を生み出していく。

八戸88ストーリーズ

寒いけどあったかい
忍耐強く艶っぽい
荒々しくて繊細
悲しくておかしい
なんだかんだ言っても
やっぱり愛おしい
わたしたちの八戸

2016年12月1日に、八戸三社大祭の山車行事は、ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」に登録された。この祭りの特色ともいえる山車は、スペクタクルな造型や色彩で、独特なオーラを放つ。ダイナミックな動勢と華やかに組み上げられる造形物が、山車の上に物語を描き出す。浮世絵やアニメのように、大胆で自由で、まさに風流山車と呼ばれるにふさわしい。

この山車の造形が、物語を伝える卓越した力を持つことに着目して、八戸のまちのさまざまな場所に、その場所にちなんだ立体的な絵巻物を展開できないか。はっちプロジェクト「DASH-JIN」が2016年度にスタートする。

市民の取材チーム「八戸スケェターず」が市内の津々浦々を取材し、市内各所に根ざした88のエピソードを書きおこした。こうして昔話や伝説、現代を生きる人々の物語まで幅広いエピソードがぎっしりつまった「八戸88ストーリーズ」が完成した。

それぞれのエピソードを写真と短い文章で展示する展覧会が、八戸市市制施行88周年の記念事業として、2017年4月28日から5月21日まで、シアター1を中心にはっち全館と八戸ブックセンターで開催された。

また、はっちプロジェクト「DASH-JIN」での造形プロジェクトの実現の方法を探ろうと、アーティストの住中浩史さんと東北の地域文化（郷土芸能、祭り）に関わる縦糸横糸合同会社の小岩秀太郎さん、山田雅也さんが、山車を制作する現場をリサーチした。

彼らは、すべての山車小屋を訪ねて対話を重ねた。住中さんは作り手の視点から、それぞれの山車組の特長や山車作りの技を探り出した。山車制作を手伝ったり、山車の曳き子としてお祭りに参加したりしながら、山車がどのように作られていくのか、その現場ではどのようなことが起こっているのかを体験的に取材していった。小岩さん、山田さんは、山車組の制作現場を陰で支えている炊き出しなどのコミュニティの人々の活動や、門付けなどに密着して、これまで光が当たることのなかった「祭りを支える」人々の存在を掘り起こし、このプロジェクトに「DASH-JIN」という名前をつけてくれた。仕事を終えてから、自身の時間を山車作りに捧げる山車組の方々の姿に、敬意を表してのネーミングだった。

▲完成した「八戸88ストーリーズ」

取材・文

はちのへスケェターず

取材に参加し、ショートストーリーをまとめた「八戸スケェターず」のみなさんです。
それぞれのストーリーブックにプロフィールを掲載しています。

- 石屋知里
- 今井田夏実
- 岩舘千和
- 大南久美子
- 大村澪由
- 小笠原彩子
- 上野幸
- 工藤恵美子
- 慶長洋子
- 河野秀清
- 榊原由季
- 佐々木彩子
- 佐々木結子
- 佐藤梨香
- 澤村春音
- 清水輝大
- 下田智美
- 下斗米一哉
- 瀬川征吉
- 堰端つちら
- 高森栄子
- 田名部遥
- 寺井麻衣子
- 寺下友
- 中居亜希子
- 中上千壽子
- 中野桃花
- 中村邦英
- 長崎泰一
- 西久保真美
- 根市遥香
- 橋本淳一
- 長谷川桃華
- 播磨李香
- 松橋広美
- 松原新一
- 松原情音
- 三浦穂乃佳
- 宮沢日菜子
- 室谷楓香
- 山本裕美
- 吉川由美
- 淀川智惠子
- 渡邊杏果

（敬称略）

▲はちのへスケェターずの募集は高校生にも行い、高校に出張しての文章講座も実施した。

はちのへスケェターず と八戸88ストーリーズ

八戸市市制施行88周年を記念し、次年度以降のはっちプロジェクト「DASH-JIN」への展開を目指し、さまざまなエピソードを八戸市内で取材して一冊の本にまとめる市民プロジェクトを行った。

取材・執筆したのは、高校生から70代までの市民有志44人。名付けて『はちのへスケェターず』である。「見るスケー聞くスケー かだるスケー！」（見て、聞いて、何より参加！）という精神のもと、スケェターずのメンバーたちは、取材に出かけた。

取材に当たっては、市内24公民館の皆様をはじめ各地域の方々に情報をご提供いただき、インタビューに応えてくださる方々を探し出して、多彩な物語を掘り起こした。まとめられた88ストーリーズは、歴史、風習、産業、文化、スポーツ、暮らしなどの多様なジャンルにわたる。『はちのへスケェターず』のみなさんは、コピーライターの鎌田高広さんの指導を受けながら、推敲を重ねて書き上げた。そこには、八戸で生きた人の実像や、今を生きる人々の姿、そして八戸のまちに刻み込まれた光と影が浮かび上がった。

歴史の中に、市井の人々ひとりひとりが生きた証があぶり出され、今を生きる私たちがその歴史とつながっていると感じられた。ささやかな日々の出来事、さまざまな人生が、長い時間の流れの中に折り重なって、まちは形づくられていく。

そのことを、本の編纂と88の物語の展示を通して、再発見することになった。

市民が掘り起こした八戸の88ストーリーズ

book No.	取材に応えてくれた方	タイトル	取材・文
6	天摩直美	子どもたちに育てられた私	佐藤梨香
12	山本純史	このまちが僕を育てた	淀川智惠子
28	泉彩菜	日本舞踊で人間修行	播磨李香
29	今川和佳子	まだ見ぬチカラを信じて	淀川智惠子
36	志村俊壽	好きこそ物の上手なれ	三浦穂乃佳
37	上田祥悦	見返りを求めぬ心	室谷楓香
41	細越健太郎	子どもたちが原動力 ～ヴァンラーレを支える熱い思い～	佐藤梨香
48	伊藤千蔵	「鬼の千」が紡いだハーモニー	上野幸
58	小笠原嘉 木村元信	自転車の街、八戸	佐々木彩子
86	坂本小九郎	版画がくれた希望	寺下友

book No.	取材に応えてくれた方	タイトル	取材・文
1	荒沢弁砂明	アメリカ出身・八戸在住・弁砂明。	小笠原彩子
3	柾谷伸夫	40年越しの約束	慶長洋子
4	宮下勝俊 安藤豊 (三菱製紙のみなさん)	その紙は届いた	河野秀清
34	深川修一	思うがままにならない海とともに	吉川由美
49	岩舘陸奥子	フライが結ぶ人と人	山本裕美
50	野田好文	競りは祭りのにぎわい	中居亜希子
65	小笠原俊彦 西山哲夫 西舘礼子	未来へ浸透していくもの	清水輝大
69	大久保直次郎	桜は今もそこに咲く	工藤恵美子

book No.	取材に応えてくれた方	タイトル	取材・文
2	川向あゆみ	命あるものをあるがままに受け入れる ～南郷ドッグラン物語～	上野幸
5	村木淳	『国宝合掌土偶』誕生の裏で	佐々木彩子
16	長根優	動物たちが無二の友	山本裕美
19	金田卓	笑顔を思いうかべて	中野桃花
21	平野直	馬たちと365日 ～騎馬打毬を支える人～	今井田夏実
32	松田浩二	ポートアイランドの近未来的巨大タンク	渡邊杏果
40	小笠原美智	ドレスに愛を込めて	淀川智惠子
64	池田光則	オオムラサキが飛んでくる庭	中村邦英
80	橋本芙美子	種差の今を伝える	松橋広美
87	沼田昌敏	沼田さんのお祭り人生！	佐々木結子

book No.	取材に応えてくれた方	タイトル	取材・文
8	伊藤二子	南部菱刺～女たちから女たちへ 受け継がれる心～	高森栄子
14	川村紅美子	百余年の時を刻み続ける 「新むつ旅館」	松原新一
18	松田智司	ご縁に恵まれて	中野桃花
22	金濱一美 金濱マス	生きがいは糠塚きゅうり	長谷川桃華
24	柾谷伸夫	死者と心を通わせる場で	宮沢日菜子
26	中尻貴之	青い目の人形「メリーちゃん」の奇蹟	慶長洋子
27	前田巌	「八皿」が育む地域の絆	松原情音
33	下村豊 赤坂誠	「27分の1」体験	榊原由季
38	松本徹 富岡明尚	おがみ神社のかぐらびと	大村澪由
39	坂本健	えんぶり発祥の地、売市	田名部遥
43	久水英一	八戸のスケートはじまりの地・勘太郎堤	岩舘千和
54	中居信明 石鉢勝憲	子どもたちをまん中に ～えんぶりの伝統と誇りを伝える～	田名部遥
55	木村昌平	ケガジの苦しみの中から	大南久美子
56	岩岡順子	時代から時代へ伝わる 本を愛する心	瀬川征吉
59	髙橋ミ子	ハマは心の楽園 ～大久喜の暮らし～	下斗米一哉
61	加藤義男 笹ノ沢神楽の人々	笹ノ沢神楽で集落を守る	工藤恵美子
62	小田法男 田村英世	豊崎奉納相撲が地域をつなぐ	寺井麻衣子

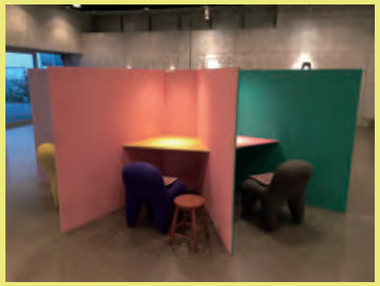
book No.	取材に応えてくれた方	タイトル	取材・文
66	大野素敬	子どもたちとともに歴史をつくる ～淀山車組の精神～	山本裕美
67	木村鉄男	豊年満作を祈りつつ踊る 「八太郎おしまこ」	室谷楓香
73	中村モト	アカハタモチが伝える八ハマの文化	西久保真美
77	笠原榮子	塩町のおかあさんの塩にぎり	西久保真美
79	藤田こと	大久保が伝えてきた数々の風習	中上千壽子
81	差波紀一	戦争遺産トーチカを守る	三浦穂乃佳
83	柾谷真市 松倉幸一 荒川繁信 大浦廣	柾谷家が代々伝えてきたお盆の行事 『ナイモナイモ』	根市 遥香
88	山田ハル	館人(たてびと)気質	中村邦英

book No.	取材に応えてくれた方	タイトル	取材・文
9	清水圭子	ハマの大事件『くじら騒動』	長崎泰一
10	滝尻侑貴	百姓たちの無血の戦い「稗三合一揆」	松原新一
13	滝尻侑貴	豪商・七崎屋半兵衛の没落	松原新一
15	清水圭子	そして八戸に住みついた	長崎泰一
35	松倉幸一	くじら橋の伝説	堰端うらら
52	山内幸治 壬生勝美 石屋正美 中村隆男	「クジラの村」南郷	橋本淳一
60	髙橋信行	「見えない力」が呼び戻した鳥居	下斗米一哉
63	奥田卓司	補任状に記された七崎の修験者たち	松原新一
74	上田三蔵	南部家を支えた新田弥六郎直義	橋本淳一
75	前原俊彦	寅吉と賢治	堰端うらら
82	前田喜代治	幻の名騎手	岩舘千和

book No.	取材に応えてくれた方	タイトル	取材・文
11	河村美知子	ビジターとともに楽しむ 史跡歩きガイドツアー	山本裕美
20	豊山くに	桃栗3年、柿8年、 夫唱婦随が創った柿の木苑	瀬川征吉
53	小玉吉美	蛍の光が照らすもの	澤村春音 清水輝大
68	小笠原八十美	ひとりひとりできることからまちづくり ～「アスネットねぎし」の活動～	慶長洋子
71	西国彦	消防団員は、今日もまちおこしの火付け役	上野幸
85	菊地敏典 菊地倫子	白山台山車組創設秘話	中村邦英

book No.	取材に応えてくれた方	タイトル	取材・文
7	畑中克夫	北の地に育まれた氷都八戸	瀬川征吉
17	豊巻つくし	ビニールとつくし先生	佐々木彩子
23	田澤修	企業城下町 江陽地区	下田智美
31	田村竹正	市川いちご物語	高森栄子
42	土谷享	中学校ロボコンの生みの親 ～故・下山大先生に捧ぐ～	吉川由美
44	島守宏和	伝統にこそ 最先端の新しさが秘められている	中野桃花
57	嶋守隆夫	神田山つつじを咲かせた人々	慶長洋子
72	舩場修	海草をお菓子に ～「より藻」が生まれるまで～	佐々木彩子
76	伊藤香葉 浅川拓克	八戸工業大学ドクターカーV3誕生秘話	河野秀清
78	久保澤恂 細越光夫	桜ヶ丘団地を作った人	中上千壽子

book No.	取材に応えてくれた方	タイトル	取材・文
25	スルメイカ	イカ釣り流儀変遷記	長崎泰一
30	石田勉	人の気持ちに寄り添って	河野秀清
45	安藤誠亮	磯釣り名人日記	中居亜希子
46	河村和男	毛皮のエキスパート	石屋知里
47	橋本俊二	水とバナナとサイダーと	河野秀清
51	中道栄治	八戸産いわしにこだわった 八戸の煮干し	高森栄子
70	村上昇 大坂誠 浜谷則和	地震に強い八戸の水道管	河野秀清
84	佐々木義夫	機関車との味なつきあい	慶長洋子



八戸88ストーリーズ

「ささえJin」「支える人 支え合う人」
人の心をささえ、コミュニティをささえる人。

「はっちJin」「八戸愛にあふれる人」
八戸をこよなく愛し、八戸のまちづくりやPRに貢献している人。

「えんのしたJin」「裏方としてがんばる人」
見えにくい舞台の裏側で力を発揮している縁の下の力持ち。

「けいしょうJin」「継承する人」
「継承Jin」時代から時代へ、人から人へ、ものごとを継承していくために地道に活動している人。

「ことはじめJin」「最初に始めた人」
「事始めJin」初めての何かを起こした人。

「くふうJin」「工夫の人」
「工夫Jin」何かを探求し、工夫に工夫を重ねて新たなものを創り出す人。

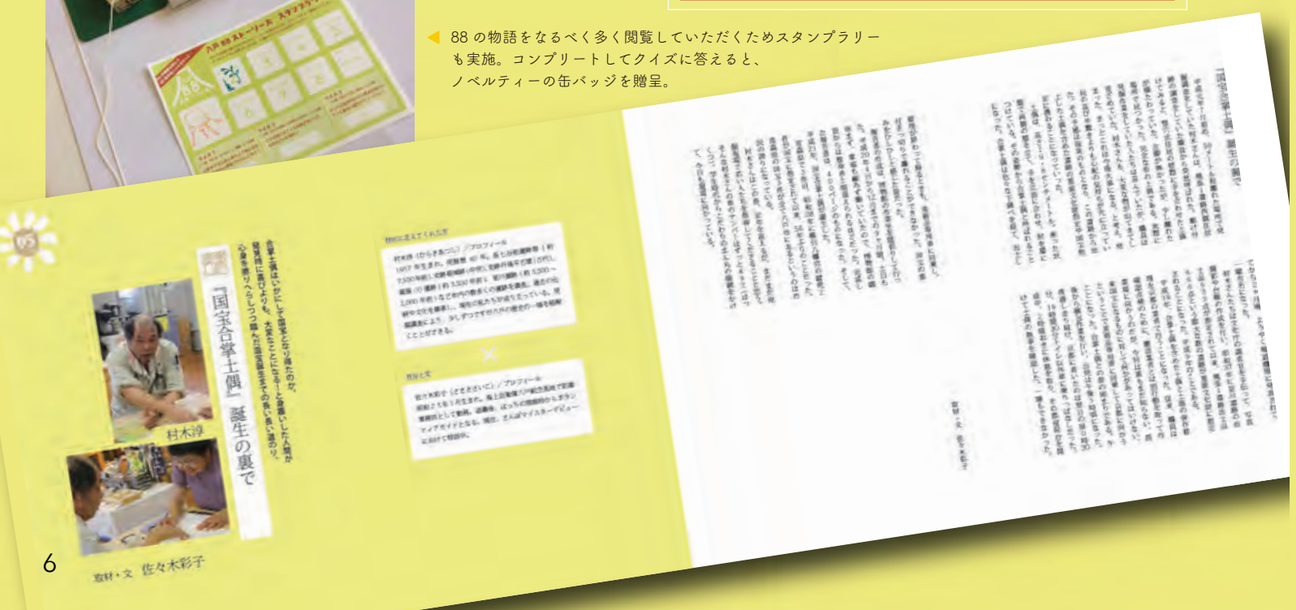
「でんせつJin」「伝説の人」
「伝説Jin」八戸のレガシーを生みだした伝説の主役。

「そだてJin」「育てる人」
「育てJin」人を育て、ことを育てる人。

関心のあるテーマの話を見つけやすくするために、88の物語を8つの「Jin」に分類しました。
それぞれのブースで、さまざまな物語との出会いが待っています。

◀ 展示は物語にまつわる「もの」の展示なども含めはっち シアター1を中心に全館に展示を分散した。シアター1には、読書コーナーを設け、じっくり読んでいただけるようにした。ブックセンターにも一部を展示。

◀ 88の物語をなるべく多く閲覧していただくためスタンプラリーも実施。コンプリートしてクイズに答えると、ノベルティーの缶バッジを贈呈。



山車小屋訪問

山車作りまっ最中の市内27山車小屋を訪ね歩いた。アーティストの住中さん、縦糸横糸合同会社の山田さんが、八戸三社大祭にまつわるさまざまな活動を撮影した。山車作りがどのように行われていくか、どのような人たちが関わっているのか、どんな道具や材料が使われているかなど、さまざまなリサーチを行った。世代を超えた人たちが集まり、ひとつのテーマのもとに山車を作り続けている現場は、刺激に満ちていた。

リサーチ

この年のリサーチ活動が、この後のプロジェクト展開のもととなった。撮影した映像は2017年度の住中さんのプロジェクトで3本のムービーにまとめられた。

山車組を支える人たちとの出会い

いただいたご祝儀や差し入れなどを掲示。地域の人たちの支援に感謝しつつ、山車組のみなさんは活動している。

山車作りだけではなく、炊き出しや着付、祭り行列へのおふるまいなど、実に多くの人々が祭りを支えていることがわかった。舞台裏で動いている人々のもとへもお邪魔し、リサーチを行った。

東北六魂祭にも密着

この年は青森市で行われた東北六魂祭に八戸三社大祭が出場。全山車組が集まって、大観衆に山車を披露した。住中さんがその様子を取材した。

祭りにも「かだって」みた

住中さんは、山車小屋でのリサーチを兼ねて、複数の山車作りを手伝いに行った。また、鍛冶町附祭若者連の祭り行列に参加して山車を曳くなど、山車組の一員となって祭りを体感した。

門付けの登板表を掲示している山車組もあった。

新井田附祭振興会は地域の病院や高齢者施設に立ち寄り山車を披露していた。

「門付け」

小岩さん、山田さんが注目したのは、祭り期間に行われる「門付け」。地域社会に祭りを支える心と仕組みが生きていることと、門付けに対する地域の対応は年々厳しくなっている実態も知ることとなった。

2017年度

子どもたち、学生たちも山車小屋へ！
ダシジンたちの情熱に触れる

2017年春、八戸立体絵巻制作を目指し、住中浩史さんは、山車組と市民とのリレーションシップをさらに醸成しようと「山車づくり応援企画実験室」を開始した。はっち5階に山車小屋各所からお借りしてきた発泡スチロール彫刻や人形、昭和の頃の山車の写真、前年度に全山車組をリサーチして撮影した映像展示などを2カ月以上に渡って行い、八戸工業大学感性デザイン学部の皆川俊平先生と学生たちと協働で山車作り支援や展示を行ったり、週末には山車小屋ツアーを開催した。多くの人たちが、山車を構成する造形物の詳細をじっくり見たり、発泡スチロールなどの素材が登場する前の山車の美しさを再発見したりした。

住中さん自身も足繁く山車小屋を訪れて、山車作りに参加する中で、発泡スチロールを曲線的に加工できる手作り熱線カッターを提供するなどして、より深い信頼関係を結んでいった。住中さんの実践が、山車組の方々とのパイプを醸成した。

小岩さんと山田さんに映像クリエーターの三塚比呂さんが加わり、子どもたちとともに山車小屋を訪れ、子どもたちが山車小屋で行われていることをレポートして映像コンテンツを制作する「8・3チャンネル」を行った。子どもたちは好奇心全開で山車小屋を冒険し、山車組の人たちに質問をぶつけた。山車制作で忙しい時期にもかかわらず、どの山車小屋でも子どもたちを歓迎してくださった。インタビューに答えてくださるみなさんの懐の深さや誠実さに感動を覚えながら、プロジェクトは進行していった。敷居が高そうに見える山車小屋は、実に開かれた場であった。子どもたちからお年寄りまでが寄り合って、ひとつのテーマを作る。その数ヶ月のプロセスは、造形の楽しさを味わうというだけではなく、そこに参加する者たちに多くの学びや他者と関わり合う喜びをもたらしていることを発見することができた。

東北の芸能や祭りに精通している小岩さんと山田さんは、特に「門付け」に着目した。山車組が門付けして歩く先に、それに応える住民の姿がある。地域のために奉仕する人々とそのことに感謝する人々の心と心が通い合う関係性が息づいている一方で、地域社会のつながりが薄れる中、その関係性にも影が差し始めていることも浮き彫りとなった。

▲山車小屋に取材に行く前にインタビューやカメラの使い方を勉強中

▲山車小屋でのインタビュー内容をみんなで検討

▲上組町若者連山車組で山車作りについてインタビュー！撮影係、カンペ係も真剣

▲番組を作り終えて打ち上げ「かんぱーい！」

▲まつりんぐひろばの山車小屋で山車作りを見学

▲緊張しながらも懸命にインタビューと撮影を敢行

▲この日、内丸親睦会には神主さんが来て安全祈願が行われていた子どもたちも一緒に参加

▲お祈りも特別に体験させてもらえた！

八戸の8、三社大祭の3、そしてお祭りの「発展」を願って名付けられた、八戸のお祭りおっかけ仮想テレビ局のプロジェクト。八戸のそこここで 365 日繰り広げられているお祭りを、新しい視点で「マツリポート（取材・記録・発信）」することで、八戸のお祭りへの魅力的な関わり方と継承方法を、みんなで共有し考えよう。

「八戸三社大祭」の山車を世界に発信しよう！！

8.3チャンネル

撮ってみる？行ってみる？
八戸三社大祭マツリポータープロジェクト 2017

★マツリポーターコース
「マツリTV番組をつくってみよう」

八戸三社大祭の山車のすごさに、マツリポーターがせまる！なかなか見ることができない「山車小屋」とお祭り当日の DASHIJIN に突撃取材します。
誰も知らない、だけどみんなに教えたい山車のヒミツ、お祭りのヒミツの番組をつくって、上映しよう。

① 2017年6月18日（日） 午後1時〜夕方まで
※一日体験コースと同一プログラムです

② 7月2日（日） お昼ごろ〜夕方まで
・マツリTV番組の作り方ワークショップ@はっち
・マツリポート（取材・撮影）@山車小屋

③ 7月23日（日） お昼ごろ〜夕方まで
・マツリポート（取材・撮影）@山車小屋

④ 8月3日（木） お昼ごろ〜夕方まで
・「八戸三社大祭」本番のマツリポート
@山車小屋＆八戸三社大祭会場

⑤ 8月中旬〜9月中旬（予定）
・マツリ TV 番組づくり体験@はっち

★マツリ TV 番組上映会・マツリ写真展
9月15日(金)〜10月1日(日)@はっち5階共同スタジオ

★一日体験コース
「みんなカメラマン」

八戸三社大祭は、3つの神社のお祭り。3つの神社のまわりには山車をつくっている「山車小屋」があります。それぞれの山車小屋を訪れて、そのヒミツをおマツリカメラで撮影しよう。

2017年6月18日（日） 午後1時〜夕方まで
・おマツリカメラの使い方研究会@はっち
・ロケハン：3神社（神明宮、おがみ神社、長者山新羅神社）の山車小屋
・写真選考会@はっち

対象　：小学生以上中学生以下
（小学3年生未満は保護者同伴）
定員　：一日体験コース 40名程度
マツリポーターコース 20名程度
参加費：無料

8.3チャンネルスタッフ
■局長 / コイワシュウタロウ
■プロデューサー / ヤマダマサヤ
■カメラマン / ミツヅカヒロ

山車小屋にはわくわくする発見がたくさんあった。仕事が終わってから、寝る間を惜しんで一生懸命山車を作っている人たちは、みんなとてもやさしかった。

子どもたちの取材映像は番組に編集され8・3チャンネル＋山車づくり応援企画実験室 DASHIJIN 写真・映像展で発表された。

山車を手作りする文化を応援する企画 2017

2017年度

山車づくり応援企画実験室

住中さんはリサーチをもとに、自らが滞在しているはっち5階共同スタジオのレジデンスルームに「山車づくり応援企画実験室」を開設することにした。

八戸三社大祭の山車にまつわる文化は、創造性と協働性（山車製作）、伝統への参加のシステム（笛太鼓、山車運行）・地域コミュニティの維持（町内会やお母さんたちの支援態制）と様々な意義と価値をもっている。しかし、山車作りに関わる人の減少、曳き手の減少など問題も抱えていることがわかった。

そこで、市民自らが『意義と価値をどう伝えるか』、『問題に対してどうやったら解決できるか』を考え続けることと、そのための小さなアクションを実験的に繰り返しやってみることが重要だと考え、若い人たちと一緒に、山車作りを応援する多数の企画を考え実行することにした。

八戸三社大祭に出かけてはいるが、作っているところは知らないという人も多い。「山車をどうやって作っているのか？」「山車を作っているところを見てみたい」「どうやったら山車作りに関われるか」など、山車作りに少しでも興味がわいた人に立ち寄っていただけるスペースをはっち5階共同スタジオに構えた。

このスペースには、山車組から借用してきた人形や発泡スチロールの彫刻などを展示するほか、住中さんが撮影した全山車組の作業風景や祭り行列、昭和の頃の古い山車の写真などを編集した映像を常時上映した。

ここを拠点に、大学生たちや訪れた市民とツアーを編成して山車小屋に出かけ、山車作り支援を行った。八戸工業大学では皆川俊平先生と学生たちがその記録をまとめ、8・3チャンネル＋山車づくり応援企画実験室DASHIJIN写真・映像展で展示した。

住中さんは山車小屋で、支援と対話を重ね、祭りにも参加。その関係性は翌年からのプロジェクトにつながっていった。

〔住中浩史制作映像〕

■八戸三社大祭と山車制作について＋全27山車組

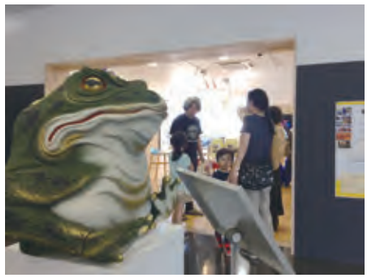
■八戸三社大祭2017　全27山車組と山車

■八戸三社大祭山車の移り変わり　大正から平成まで

アーティスト・プロフィール

住中浩史

アートという価値観を通じ、地域社会の中でその場・その時とシンクロしつつ、そこに自分を通じて付加できる価値観や物語を探し加える活動を行っている。地域『で』アート活動を行うのではなく、その地域『の』アートとは何かを絶えず模索しながら、実際に制作・行為・会話の中で実践している。近年は、表現の専門家のためでない『場』づくりや様々な地域・場での活動を丁寧に記録する活動も行っている。



▲５階レジデンスには市民のほか観光客もやってきた

▲昭和の頃からの山車のアーカイブ

▲竹や紙などで作っていた時代の造形もすばらしい

▲何度も描き直して使う人形

▲炎などの発泡スチロール彫刻や兜なども触れながら鑑賞

▲猿の表情など遠くから見てもはっきり見えるように描かれている

▲「どうして寝ないで山車を作っているんですか？」「なぜかなぁ・・」

▲山車組の人が食べていたお弁当のことも聞いてみた

▲屯所の中で発泡スチロール彫刻が作られている

▲夜はお囃子の練習が行われる

▲３時のおやつ　しっかり休憩してまた集中

▲地域の方々からもさまざまな差し入れをいただく

▲お昼を食べて、午後もがんばるぞ！

▲衣装を作る部屋では子どもたちが遊んでいた

▲行列の後の打ち上げでは子どもたちも一緒に乾杯！

▲山車作りのまっ最中の日曜、炊き出しをみんなでありがたくいただく

▲小学生からおじいさん世代まで山車組では世代を超えたおつきあい

▲おかあさんたちが朝から作ってくれた昼ご飯

山車組に密着！

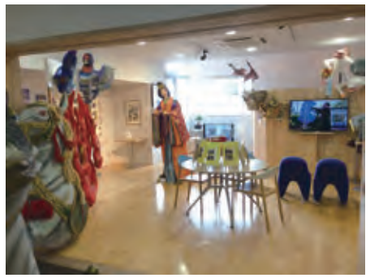
山車作りをお手伝いしながら、縦糸横糸合同会社の記録撮影も継続。翌年の教材制作のためのリサーチと資料映像撮影を行った。

山車組のこだわりや造形力を間近で見られる山車人形や発泡スチロール彫刻の展示や八戸工業大学感性デザイン学部の１年生が、山車作りを手伝った

▼その活動の記録も展示された「８・３チャンネル＋山車づくり応援企画実験室 DASHIJIN 写真・映像展」（2017.9.15-10.1）

▲大学生たちの記録展示

▲山車小屋からお借りしたさまざまなアイテム



▲山車飾りの造形の詳細をじっくり観察できる

▲ミニ山車作りも有志により行われた

▲人形用の兜をかぶってみた

▲朔日町附祭の行列に参加する住中さん（右）と大学生たちや皆川先生（前列右から３人目）

2018 DASHIJIN はっぴょうプロジェクト

小学校での祭教育プログラムの醸成 ～「八戸三社大祭をささえる人たち」

2018年秋、縦糸横糸合同会社の小岩秀太郎さん、山田雅也さん、三塚比呂さんに、プロジェクト・ディレクターの吉川も加わり、小学生のための総合学習プログラム制作（2校時2回計4校時の授業）と4つの小学校でのトライアル授業を行った。これまで撮りためた映像から教材映像を制作し、なぜ人々は祭りを始めたのかを考え、八戸三社大祭の祭り行列は本来誰のために行われているのかを学ぶ。そして、この祭りの呼び物である山車を作る人たちとそれを支える人たちとの関係性に着目し、教室に門付け体験を持ち込んで、子どもたち自身が、祭りに貢献している山車組の人たちの奉仕に、どのように応えることができるかを自分事として考える学習プログラムを創り出した。その指導案や教材映像、資料プリントやワークシートなどを八戸市教育委員会に提供し、先生方に活用していただくことにした。

▲授業を行う小岩さん

▲なぜ祭りが始まったのか考えてみる

▲淀山車組が子どもたちの質問に答える

▲トライアル授業の後、先生方と振り返りの時間を持ち授業の改善点などを話し合って、指導案を改稿していった

アーティスト・プロフィール

小岩秀太郎

“東北” の暮らしの中で受け継がれる「地域文化」に関する専門的知見と、新たな視点や関わり方を繋ぎ合わせたプロジェクトを共創する縦糸横糸合同会社 代表・コーディネーター。1977年生まれ。岩手県出身。
郷土芸能「鹿踊」伝承者。（公社）全日本郷土芸能協会（東京都）に入職し、芸能の魅力発信や東日本大震災復興支援、コーディネートに携わる。東日本大震災を契機に「東京鹿踊」ならびに「縦糸横糸合同会社」（2016年創業・宮城県仙台市）を立ち上げ、「東北」に残る日本の豊かで深い地域文化を発掘・編集し、他分野・新分野や次代へ繋ぐ企画提案を国内外で行っている。
東北と東京の二拠点で活動中。

山田 雅也

縦糸横糸合同会社 企画プランナー・コンテンツプロデューサー。1980年生まれ。群馬県出身。
TVCM や映画制作における技術サポート、クリエーターマネジメント、プロデュース業を経験。東日本大震災を契機に東北に伝わる地域文化の価値と魅力を再考する場を作り、発信し、次代へ継承するための活動として「東京鹿踊」「縦糸横糸合同会社」を立ち上げ。鹿踊を踊る一方で、東北の風土や文化を活かしたコミュニケーションデザインの企画プロデュースを行っている。
東北と東京の二拠点で活動中。

▲自分がお祭りのために貢献できることは何かを考えて山車組の人たちに伝える

▲山車の上に載っている彫刻に初めて触った子どもたち「かたい！」「何でできているの？」と口々に

これまでのリサーチで撮影した素材や知見をもとに、実際の教育現場で活用しやすい教材作りを進めた。できあがったプロジェクトを検証しブラッシュアップするために、吹上小、八戸小、城下小、白山台小でトライアル授業を行う機会をいただいた。

八戸市教育委員会から、近くに山車組がある小学校を中心として、お声がけいただき、手を挙げていただいた小学校に趣旨・内容を説明して、トライアル授業を行う運びとなった。

子どもたちが学んでいる『八戸三社大祭』は、祭りに関する一般的な情報が主なものである。DASHIJINの教育プログラムでは、これだけ長い間、なぜ祭りが続いて来たのか、祭りまでの長い期間、多くの人々がどのように祭りに関わっているのか、支えているのかという、祭りの継続の本質に繋がる学びを提供したいと考えて、授業を組み立てた。

最終的に、2回の授業のKeynote(Power Point)、7つの教材映像、配付資料プリント3種、ワークシート、目録キットを制作した。

1回目の授業は、「八戸三社大祭のヒミツ発見！」と題し、8つのヒミツを子どもたちが教材映像から発見していくという流れとした。それぞれのヒミツを発見するために、教材映像やプリント資料を制作し、子どもたちのグループディスカッションで考察を深める仕立てとした。

2回目の授業は「祭りを支える心にタッチ！」と題し、祭りをささえる八戸市民の存在に気づき、小学生の自分に何かができないかを考えると同時に、そのコミットメントを目録に表明し、ゲストの山車組の方の音頭上げに応え、目録を贈呈する体験をするという流れにした。山車組の方と心を通わせ、ひとりひとりが自分事として、八戸三社大祭を支える小さな体験をすることを目指した。

学校のカリキュラムの中で、2校時×2回という時間をとることはかなり難しいと思われるが、その時間に値する学びに繋がるように、多面的な学びを授業の流れの中に散りばめていった。

毎回の授業を終えた後、先生方に振り返りの時間をとっていただき、授業の流れや教材に対するアドバイスをいただいた。そのおかげで、4校でのトライアル授業の度に、バージョンアップを図ることができた。

2回目の授業では、山車組の方々に子どもたちのさまざまな疑問に答えていただいたり、門付けで行われる音頭上げを子どもたちのために行っていただいた。

最後の白山台小での授業では、音頭の歌詞を子どもたち用に変えて音頭上げしていただいたことで、子どもたちの心に、歌に込めた思いが届いた。子どもたちは祭りを支えている人たちが、地域の人たちに喜びやめでたさを届けたいという思いで活動していることを体感してくれたことと思う。

祭りについての知識や情報を題材とするのではなく、人々の思いにフォーカスすることで、多面的な学びになったと、先生方から高い評価をいただくことができた。

トライアル授業実施

- 吹上小学校　9/10(月)14:00-15:45　9/14(金)14:00-15:45
- 城下小学校　9/11(火)14:00-15:35　10/11(木)10:30-12:15
- 八戸小学校　10/18(木)10:30-12:00　10/22(月)10:30-12:00
- 白山台小学校　10/19(金)14:00-15:35　10/23(火)14:00-15:35

配付資料

DASHIJIN 教育プログラム
【八戸三社大祭のヒミツ発見！】

「羽白熊襲物語」さし絵より　八戸市博物館所蔵

人々の命をおびやかした、八戸地いきの「ききん」

八戸地いきは、海からふきこむ「やませ」というつめたい風に、何度も苦しめられてきました。「やませ」が吹くとさむさや雨がつづいて、農作物がみのらなくなってしまうのです。

今から240年ほど前には、数年にわたり、夏なのにわたいれをかさねて着なければならないほど、寒い日がつづいて、食べ物がしゅうかくできなかったことがあったそうです。そのころのようすを えがいたのが、上の絵です。人々や家もくの馬が死んでいます。人々は海そうや草、わらびの根をほって食べました。わらも粉にして食べたそうです。

当時、65,000人あまりの住民のうち、30,000人あまりの人々がなくなったと伝わっています。

昔はきびしい大しばんを前に、人々は食べ物がとれるようにと、いのることしかできなかったのです。

寒冷な気候に苦しめられた
人々の生活を知る歴史資料

DASHIJIN 教育プログラム
【祭りをささえる心にタッチ！】

門付け

山車を作る材料や、山車をひく人やおはやしの人たちのいしょうやお弁当などのひようをあつめるため、山車組の人たちは、地いきのみなさんの家やお店、会社などに「門付け」をします。みなさんのところに行って、「水やり音頭」といううたをうたいます。それを「音頭あげ」といいます。

その家がますますさかえますように、そのお店や会社がますますはんじょうしますように。

行く先によって、山車組の人たちがうたううたのかしは、かわります。

門付けされた地いきの人たちは、山車組の人たちにお金をさふします。

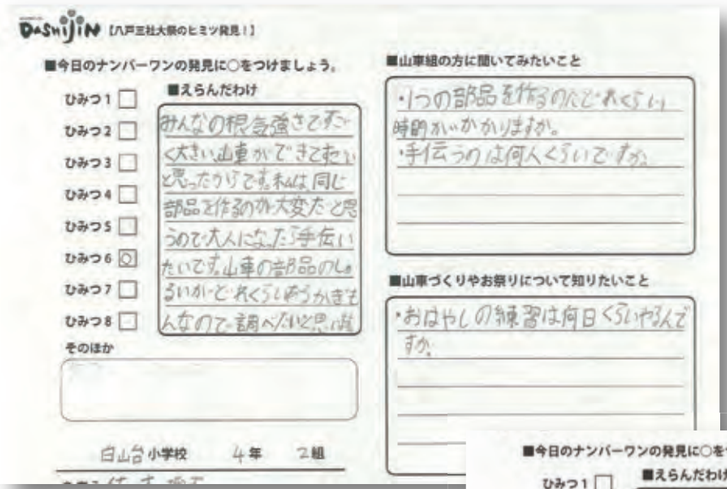
会社やお店では、「食べ物」などをさふしてくれることもあります。

門付けの時間は、地いきの人の心と山車組の人たちの心が通い合うひとときです。山車組のかつどうをささえているのは、おたがいを大切に思いやる心なのです！

家々のしあわせ、
お店や会社のしょうばいはんじょう
をいのってうたいます

山車組の人たちを
ねぎらって
「きふ」します

門付けでは各家やお店の繁栄
を願い、歌詞を変えて歌われる



DASHIJIN 【八戸三社大祭のヒミツ発見！】

■今日のナンバーワンの発見に○をつけましょう。

ひみつ1 □
ひみつ2 □
ひみつ3 □
ひみつ4 □
ひみつ5 □
ひみつ6 ☑
ひみつ7 □
ひみつ8 □
そのほか

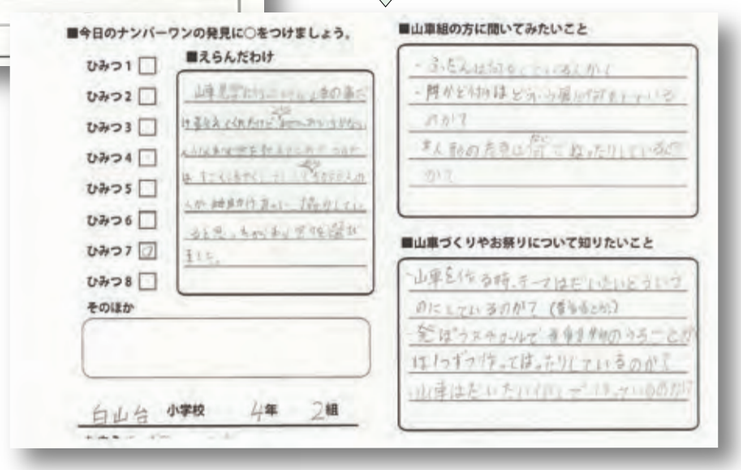
■えらんだわけ
みんなの根気強さすごくでかい山車ができてすごいと思ったからです。私は同じ部品を作るのが大変だと思うので大人になったら手伝いたいです。山車の部品のしゅるいがどれくらいあるかきもんなので調べたいと思ったから

■山車組の方に聞いてみたいこと
・1つの部品を作るのにどれくらい時間がかかりますか。
・手伝うのは何人くらいですか。

■山車づくりやお祭りについて知りたいこと
・おはやしの練習は何日くらいやるですか。

白山台 小学校　4年　2組

ワークシートに書き込むことで
学びの振り返りと次回への準備
を行う



■今日のナンバーワンの発見に○をつけましょう。

ひみつ1 □
ひみつ2 □
ひみつ3 □
ひみつ4 □
ひみつ5 □
ひみつ6 □
ひみつ7 ☑
ひみつ8 □
そのほか

■えらんだわけ
山車見学だけでもすごい山車の事だけ考えてくれたのにびっくりしました。人数多くてもすごくてびっくりしました。すごくもすごくて、どうやって人のかが神様が作ったのに驚かしていると思ったちがあり学校選びました。

■山車組の方に聞いてみたいこと
・ふとんはなんていろいろかい
・門がど付けはどこから頼まれますかいそがしかい
・人形の方きは何でねったりしているのかい

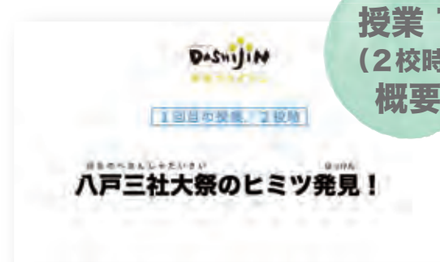
■山車づくりやお祭りについて知りたいこと
・山車を作る時、テーマはだいたいどういうのにしているのかい？（書いるとか）
・太鼓やうちわやクルマ、音楽等物のうちーとかはいつぐらい作ってはったりしているのかい
・山車はだいたい何人でつくっているのかい

白山台 小学校　4年　2組

ワーク
シート

2018年度

授業1（2校時）概要



DASHIJIN
1回目の授業／2校時
八戸三社大祭のヒミツ発見！

八戸では
地域を守る
消防団の人々が
山車作りを
始めた
今も市民が
ボランティアで
作り続けている

ヒミツ4
「八戸三社大祭」の
山車作りは八戸市民
のボランティアで
行われている！

ヒミツ5
「八戸三社大祭」の
山車作りは
住民たちで組織していた
火消しが集まる
「町所」単位で
行われていた。

みんなで作る
場は集まる人
の成長の場
になっている

ヒミツ6
同じ部品を繰り返し
みんなで作る。
八戸の山車づくりの中で
八戸人の根気強さが養われている。

八戸三社大祭を
支えているのは
山車組だけでは
ない

八戸では
さまざまな人が
さまざまな形で
祭りを
支えている

ヒミツ7
見えないところで
さまざまな八戸市民が
いろいろなやり方で
八戸三社大祭を
ささえている！

八戸三社大祭
の時に行われる
門付けって何？

門付けでは
地域の人たちの
心が通い合う

配付資料

ヒミツ8
門付けには
地域の人たちが
お互いを大切に思う心が
表れている

発見した
八戸三社大祭の
ヒミツを
振り返る

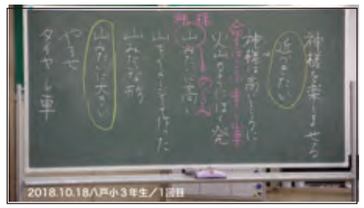
人は何を
願って祭りを
始めたの
だろう？

食べ物を
得られず
生きることが
困難だった
時代を想う

配付資料

ヒミツ1
「八戸三社大祭」には
「食べて生きていけますように」
という八戸の人々の思いが
こめられている！

お祭りの山車
や芸能は
何のために
あるのだろう？



神に願いを
届けるために
捧げた

ヒミツ2
「八戸三社大祭」で
演じられる歌や踊りは
神様にささげられている！

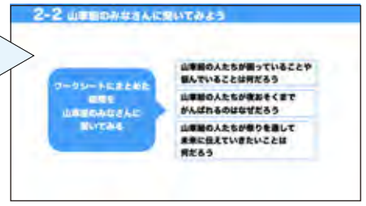
ヒミツ3
恵みをもたらす山
（自然）を
大切に思う気持ちが
山のように大きな
「山車」にこめられた！

八戸三社大祭の
山車は誰が
どこで
どのように
作っている
のだろう？

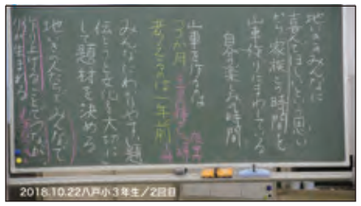
授業２（２校時）概要

2018年度

支える人がいるから祭りを続けることができる

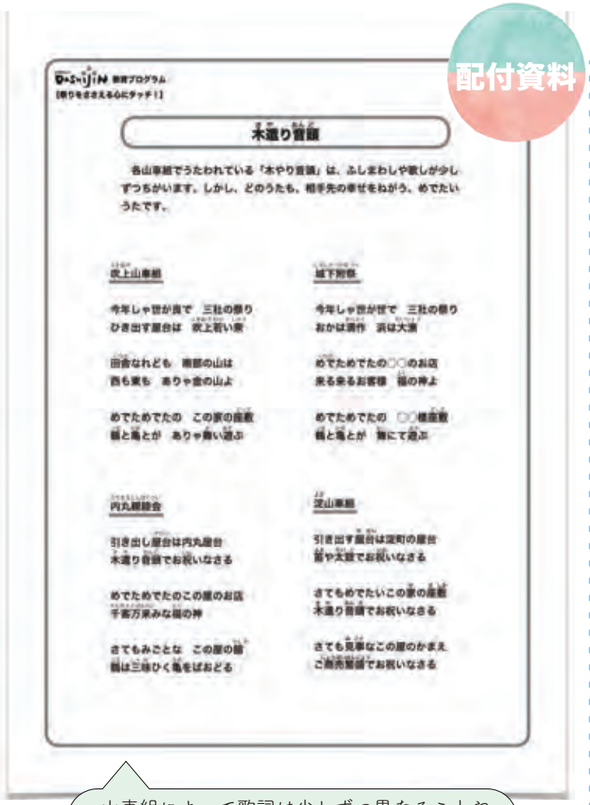


疑問に思ったことを山車組の人たちに聞いてみよう



配付資料

山車組の人たちから門付けの音頭上げをしていただく



配付資料

山車組によって歌詞は少しずつ異なることや時と場所によって歌詞を変えて歌うことがあることを知る

音頭に込められた思いを考えよう

思い を受け取り山車組の労に報いるためにできることを考えてみる。

キモチ目録キット

目録として自分の気持ちを丁寧に包む

心を込めて山車組の方たちに渡そう

自分たちのために音頭を上げてくれた山車組の方の気持ちに応えることができた！

心と心が通い合う瞬間が、門付けにはある

今まで見えていなかった支えるということこそ伝統をつなぐために必要なこと

授業を終えたら必ず先生方と振り返りを行い改善すべき点を出し合う

八戸三社大祭を支える人になる。自分に何ができるかな？

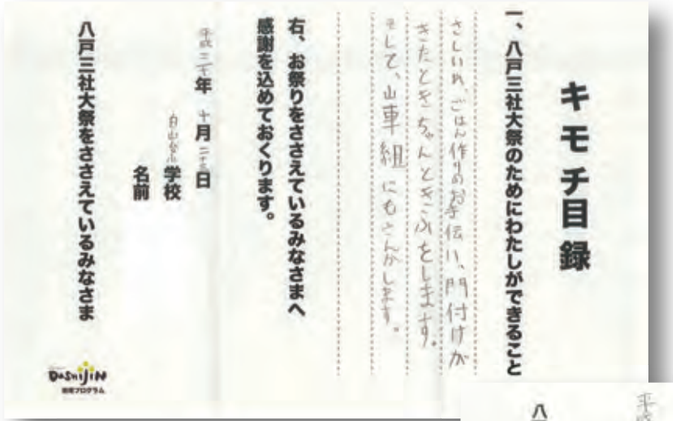
何ができるかみんなで話し合ってみよう

「キモチ目録」に自分ができることを書いて山車組の音頭上げに応える

自分が八戸三社大祭のためにできることを山車組の方に発表して伝える

2018年度

ワークシート



キモチ目録

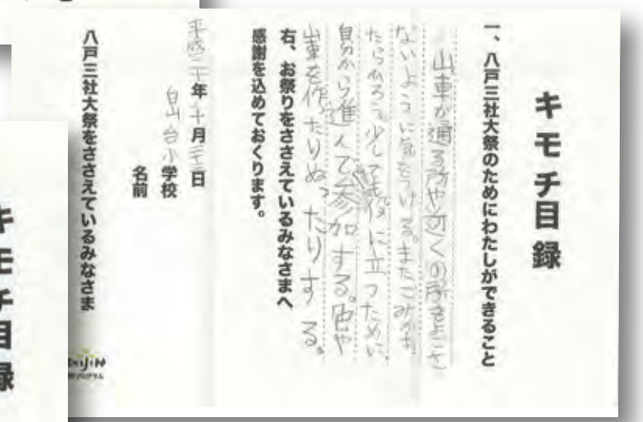
一、八戸三社大祭のためにわたしができること

さいしょ、ごはん作りのお手伝い、門付けかさたとをちゃんとさいかしまする。そして、山車組にもさんかします。

右、お祭りをささえているみなさまへ
感謝を込めておくります。

平成三十年十月三日
白山台小学校
名前

八戸三社大祭をささえているみなさま



キモチ目録

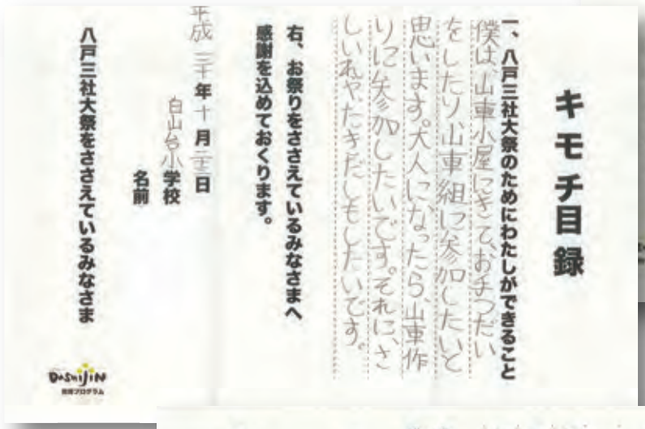
一、八戸三社大祭のためにわたしができること

山車が通る所や辺くの所きょこと
ないようにきをつけるまたごみがち
らばるから少しでもいに立つため
早めから進んで参加する。出や
山車を作ったりぬったりする。

右、お祭りをささえているみなさまへ
感謝を込めておくります。

平成三十年十月三日
白山台小学校
名前

八戸三社大祭をささえているみなさま



キモチ目録

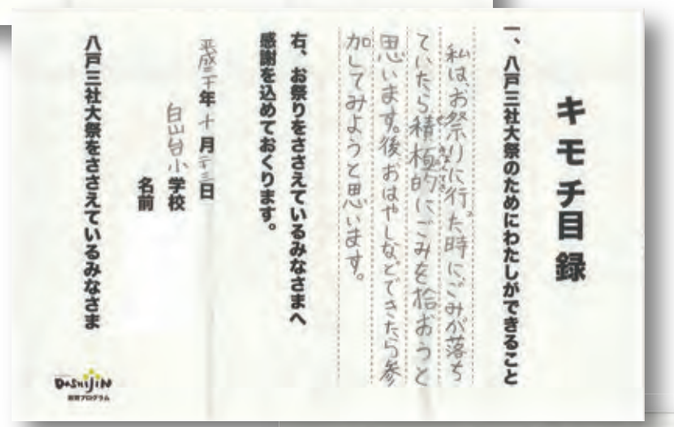
一、八戸三社大祭のためにわたしができること

僕は山車小屋にきておちつだい
をしたり山車組に参加したいと
思います。大人になったら山車作
りに参加したいです。それにさ
しいれやたきだしもしたいです。

右、お祭りをささえているみなさまへ
感謝を込めておくります。

平成三十年十月三日
白山台小学校
名前

八戸三社大祭をささえているみなさま



キモチ目録

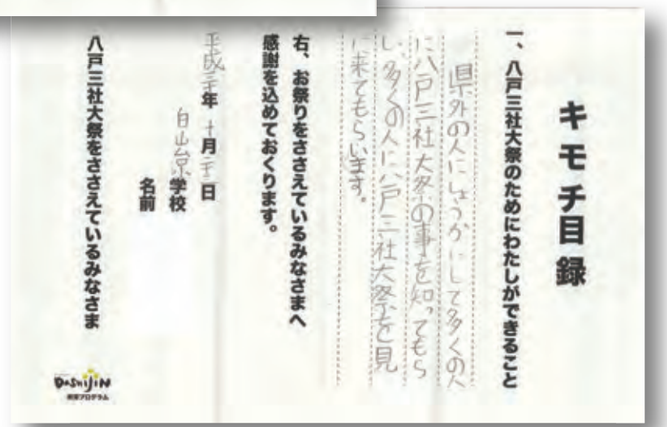
一、八戸三社大祭のためにわたしができること

私はお祭りに行った時にごみが落ち
ていたら積極的にごみを拾おうと
思います。後おはやしなどできたら参
加してみようと思います。

右、お祭りをささえているみなさまへ
感謝を込めておくります。

平成三十年十月三日
白山台小学校
名前

八戸三社大祭をささえているみなさま



キモチ目録

一、八戸三社大祭のためにわたしができること

県外の人にしょうかいして多くの人
に八戸三社大祭の事を知ってもら
し多くの人に八戸三社大祭を見
に来てもらいます。

右、お祭りをささえているみなさまへ
感謝を込めておくります。

平成三十年十月三日
白山台小学校
名前

八戸三社大祭をささえているみなさま

子どもたちは
八戸三社大祭を支えるために
自分ができそうなことを
考え出した。
さまざまな支え方が
あることを
みんなで確かめ合った。

山車組のみなさんも
子どもたちと心が通った
門付けを通して
祭りの意義を改めて
かみしめていた。

2018.10.11 城下小3年生／2回目

2018.10.23 白山台小4年生／2回目

授業の合間には山車組のみなさんに
子どもたちの質問が殺到！

2018.10.22八戸小3年生／2回目

2018.10.22八戸小3年生／2回目

山車の上に載っている彫刻も初めて触ってみた
意外に硬い！発泡スチロールでできていたのか

2018.10.23 白山台小4年生／2回目

炎の削り方にも
興味津々

2018.9.11 城下小1回目

鯛も本物みたいに
できている

「学舎に葉が繁る」という内容の歌詞に変えて
歌ってくれた白山台山車組

2018.9.14 欠上小2回目

山車組のみなさんには子どもたちから
さまざまな質問が寄せられた

2018 はっちプロジェクト DASHIJIN

市民×山車組×アーティストが“まち”と共創する造形プロジェクト

2018年、現代美術家の土谷享さん（KOSUGE1-16）に参加していただき、山車組と市民との協働制作の場を創り出した。

当初、市内各所に造形を展開することを目指していたが、発泡スチロールという素材が主体となる造形物は風や火などに弱く、管理が難しいことと、山車組のみなさんが協働制作に協力できる期間が限られることから、計画を変更することにした。

KOSUGE1-16が全国の美術館などで展開して来た自転車動力の木製メリーゴーラウンドをベースに、「八戸88ストーリーズ」から「八皿」という田面木地区の風習を取り上げ、その世界観を市民とともに山車の造形で表現するというプロジェクトにシフトすることにした。題して、「DASHIJIN LAND」。

山車組のみなさんとのミーティングの中でわかったのは、山車の造形は彫刻単体の出来不出来ではなく、さまざまな造形物をどのように構成し組み上げるかというところに、その真髄があるということだ。人形や彫刻が単体で置かれていても、それは山車の世界ではない。時空を超えた物語を語るために、立体的に彫刻や人形を配置し、それらのすき間をさまざまな造形物で埋めながら物語の世界感を膨らませていく。

KOSUGE1-16の土谷さんは、現代のお祭りは「する人」と「見る人」という関係性の中で考えられがちだが、「支える人」がいないとできないと指摘した。市民の「支える力」は、メリーゴーラウンドを回すために、自転車をこぐ人の姿で見える化される。

各山車組から借用した龍の発泡スチロール彫刻を塗り直してメリーゴーラウンドに合わせて補修し、波しぶきや発泡スチロールの波を市民ワークショップで制作した。自転車を覆う巨大な「きん斗雲」は新たに制作した。

1月末から2月中旬まで、山車人たちが連夜はっちに集まり、制作が続けられた。はっちは真冬の山車小屋になった。ワークショップに参加した子どもたちや市民も、学校や仕事が終わると山車作りにやって来た。

山車組独自の造形世界を市民と協働で創作することだけにとどまらず、メリーゴーラウンドを運営するために演劇人や高校生などにも参加してもらって、地域固有の伝説の中で遊べる世界を創り出すことにした。スペースベンの田中勉さん、そして八戸市民に馴染み深いエンターテイナーの十日市秀悦さん、八戸東高校の江渡将先生や演劇部有志のみなさんが加わり、高校生がオリジナルのテーマソングを一夜にして作曲するなど、驚くべき力を発揮してくれた。DASHIJIN LANDは、それぞれが持てる力を発揮することで命が吹き込まれ、「八皿」にまつわるヤマタノオロチ伝説の世界で遊ぶ「遊園地」になった。十日市さんは、メリーゴーラウンドを動かす人と、乗って楽しむ人との間に生まれる心の通い合いを、すばらしいトークで盛り上げ、山車組の人たちの素顔をあたたかく紹介してくれた。

2月9日から11日の運営で、市民と山車組のみなさんが交流する場として、KOSUGE1-16が仕掛けた屋台が運営された。

熱線カッターで発泡スチロールの板を型抜きをする。その出来映えを山車組の親方たちがチェックする。賞品として、発泡スチロールで作られたかき氷、チョコバナナ、たこ焼き、イカ焼きなどが参加者に贈呈された。子どもも大人も、山車作りの作業を体験し、山車組の人たちとのふれあいを楽しんだ。

この運営期間ははっちの8周年にあたり、その記念コンサートのためにやって来た楽団が、このメリーゴーラウンドに乗って演奏したり、十日市さんとマチニワの周辺を演奏しながら練り歩いたりするなどして、極寒の季節にもかかわらずDASHIJIN LANDは熱気に包まれた。

土谷さんから、自転車動力の木製メリーゴーラウンドという装置をベースにするアイディアを出していただき、それをもとに山車組のみなさんとどのようなものを作っていくか、市民との協働をどのようにするかを話し合った。

「八戸88ストーリーズ」から選んだ「八皿」は、ヤマタノオロチ伝説にまつわる風習であるため、市民にもわかりやすい題材だということ、また山車組で保管している龍の発泡彫刻を借用し、補修ののし塗り直せば短期間で、メリーゴーラウンドを飾れるのではないかということから、八皿をテーマにDASHIJIN LANDを作っていくことにした。

ヤマタノオロチに襲われそうになっているメリーゴーラウンドに乗る人々を、スサノオノミコトが助けにやって来る瞬間を描くことにし、物語の一員になって、メリーゴーラウンドを楽しんでもらえるよう、当日の運営には演劇人に協力をもらうことにした。

山車組のみなさんには、彫刻や波などの借用の段取りや、制作協力の声がけをはちのへ山車振興会を通して行っていただいた。

市民ワークショップを週末に開催し、制作への市民参加も進められるよう計画した。

テーマ「八皿」

八皿は、田面木地区に伝わる旧暦２月８日に行われたトマドフタゲ（魔除け）の行事。

親戚一同が集まり、お膳に８つの朱塗りの皿、中央に椀を置いて、８つの皿に甘酒を注ぎます。その後、皿の甘酒を中央の椀に注ぎみんなで飲みます。皿からお膳にこぼれた甘酒は、家の入口にまいて魔除けにするという風習です。

由来については２つの説があります。

そのうちのひとつは、ヤマタノオロチをスサノオノミコトが退治し、３種の神器のひとつであるアメノムラクモノツルギを手に入れた伝説から始まったという説です。

田面木地区に伝わる「八皿」の風習
▼８つの皿になみなみと注がれた甘酒で邪を払う

はっちが山車小屋になった日々

▲石橋元平さんの山車絵をもとにメリーゴーラウンドまわりに組み上げられる山車飾りが作られた

▼はっち５階を山車小屋にするために、土谷さんが空間設営を開始

▲KOSUGE1-16 制作の人力メリーゴーラウンドをマチニワに設営する。自転車をこぐと、木の歯車が動いて盆がまわり、人がすわる椅子が上下する。小学生でも大人を乗せて盆を回すことができる。音楽でこぎ手の時間を限定し、曲が終わったらこぎ手が交代する。こぎ手とメリーゴーラウンドに乗っている人の間に、心通い合う時間が生み出される。

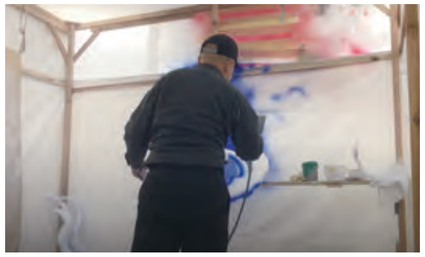
◀住中さんと北條さんも駆けつけ作業をアシストしてくれた

▲龍のパーツを作る北條さん

▲石橋さんと土谷さんがイメージをすりあわせる

▲山車組のみなさんがいない昼間も着々と補修作業

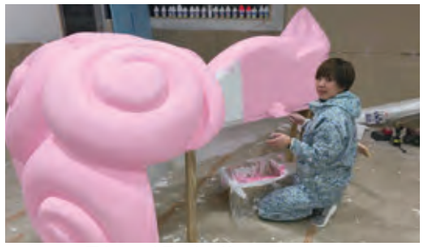
▲忙中閑あり



▲波に着色する市澤さん

▲石橋さんが作業をメンバーに共有

▲黙々と波を削る吉田さん



▲自転車を覆うきん斗雲に色を塗る河原さん

▲八戸在住の外国人のみなさんが足繁く参加してくれた

▲屋台の賞品用チョコバナナ作り

▲修行のようにバナナを作る

▲巨大きん斗雲は自転車と一体化される

▲賞品の彩色も続く

▲屋台の賞品用かき氷とフライドポテト

▲たまたま八戸を訪れた小岩さんもバナナ作りに飛び入り

▲炊き出しで腹ごしらえ

▲はちのへ山車振興会の小笠原会長が鍋を作ってくれた

▲終盤は子どもたちも山車人の仲間入り

2018年度

ワークショップ みんなで作ろう！ DASHIJIN LAND

竹と新聞紙、銀紙と糊で、昔ながらの波しぶき作りを体験。発泡スチロールの波が主流になる中で貴重な機会になった

子どもたちも大人たちも、同じ作業を黙々と行った。真冬のはっちは、本物の夏の山車小屋のようだった

発泡スチロールで作った波を紙やすりで削って立体的な波に仕上げていく。コツを教えてもらいながら黙々と成型する

1月26日（土）・27日（日）、2月2日（土）・3日（日）の週末、はっち5階で市民ワークショップを開催した。

今は造形が簡単にできる発泡スチロールが山車のさまざまなところに使われているが、昔は竹や紙などを使い、工夫して作られていた。今でも昔ながらのやり方で波しぶきを作っている山車組から教えてもらい、伝統的な作り方を体験した。

発泡スチロールで波を作り終わった後、子どもたちのほとんどが、バナナを作りたいと会場に残ったため、山車組のみなさんが急きょ発泡スチロールをバナナの形に切り出す作業に汗だくで追われた。この作業は子どもたちにとっても、格別に楽しいひとときになった。夜の作業に毎晩通う子どもたちも現れた。つなぎを着て、大人たちと同等に作業する子どもたち。DASHIJIN LANDに毎日訪れ、自転車をこいでいた。

カッターでバナナの形があっという間に作られる様子に目は釘付け

▲子どもたちのためにバナナの形を汗だくで切り出す工藤さん

子どもたちはバナナ作りに夢中

2018年度

演劇人がDASHIJIN LANDの世界をつくる

▲十日市さん（右）、東高校演劇部の澤田さん（中央）と運営について考える

田中勉さんをコーディネーターに、十日市秀悦さんや八戸東高校演劇部有志ほか、市内の高校生有志が集合。何度もはっち5階の制作現場に通って、DASHIJIN LANDの運営コンセプトを練り上げた。

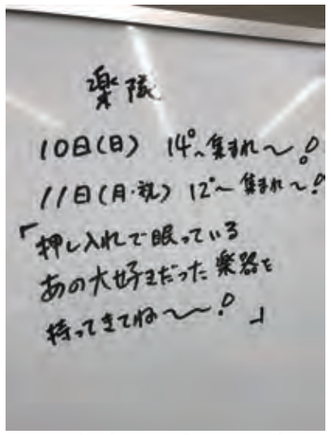
設定は「八皿の守人たち」。ヤマタノオロチ伝説を説明しながら、メリーゴーラウンドの乗客の乗降を管理したり、こぎ手を募ったり、こぎ手の交代を仕切ったりするという重要な役どころ。

東高校のみなさんが曲を作ってくれたり、現場で盛り上げる台詞の台本まで考えてくれた。十日市さんとリハーサルも行い、本番へ。

十日市さんは、「いさばのかっちゃ」のキャラクターで現れ、こぎ手と乗客の間に温かな関係性が生まれるようなMCで場を盛り上げた。また、楽隊と一緒に演奏する即興コンサートなど、さまざまな即興パフォーマンスをマチニワで展開するとともに、山車組のみなさんの祭りにかける情熱や見えないところでがんばっている姿を讃えるトークで、このプロジェクトのテーマを来場者に伝えてくれた。

▲十日市さんとの打合せは笑いが絶えない。右は万谷さん

▲演劇人をコーディネートしてくれた田中さん（左）



▲十日市さんの即興コンサート決定！

DASHIJIN LAND
やさら もりびと
八皿の守人

DASHIJIN LAND
ほめタイム

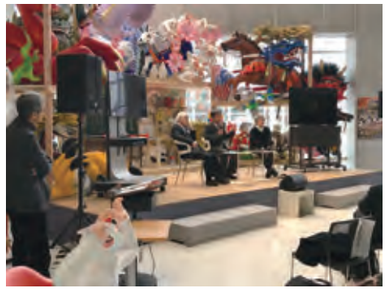
▲八戸弁を使っての盛り上げのためにリハーサル

▲「八皿の守人」たちはヤマタノオロチ伝説を語って盛り上げ中！

DASHIJIN LAND 設営作業

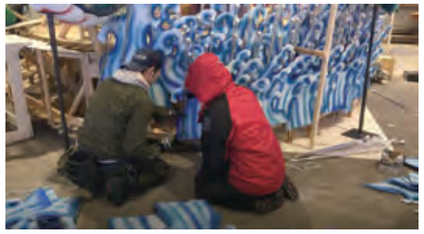
はっちひろば

はっちひろばには、山車小屋をイメージしたインスタレーションを住中浩史さんが制作。このステージで、はっち8周年のセレモニーや特別企画のアートNPOフォーラムのセミナーなどが開催され、全国から集まったアートNPOの方々でにぎわった。



マチニワ

極寒のマチニワでの設営作業。はっち5階から発泡スチロールの彫刻や屋台セットを運び、メリーゴーラウンドへの飾り付けが始まった。
龍の胴体の角度を微妙に調整すると、龍がまるで生きているかのような迫力になる。山車人たちの豊かな経験で、生き生きした世界が生み出されていった。



▲発泡スチロールのチョコバナナに大興奮！

▲型抜き屋台は大好評。大人も本気を出していた

▲上手に型抜きできたら賞品はかき氷だよ。

▲舘下兄弟はすでに山車組の一員

▲毎晩一生懸命作りました、チョコバナナ

▲みんながんばって

▲親方たちの審査はきびしい

▲型抜きやりたい！

みんなで回し続けた メリーゴーラウンド in マチニワ

■制作・運営にご協力いただいた山車組のみなさん

○赤坂誠 / 内丸親睦会
○市澤伸乃佑 / 下組町山車組
○大畑浩一 / 下大工町附祭若者連中
○工藤和幸 / 朔日町附祭
○佐々木原由佳 / 白山台山車組
○島下一成 / 下大工町附祭若者連中
○下村豊 / 内丸親睦会
○中居林拓郎 / 糠塚附祭組
○庭田英明 / 糠塚附祭組
○服部匡貴 / 下大工町附祭若者連中
○吉田匡克 / 青山会山車組
○石橋元平 / 十一日町龍組
○上村隆也 / 鍛冶町附祭若者連
○河原智子 / 鍛冶町附祭若者連
○近藤慶央 / 朔日町附祭
○佐々木瑞穂 / 鍛冶町附祭若者連
○下村隼人 / 内丸親睦会
○鈴木英明 / 十一日町龍組
○中居林義直 / 朔日町附祭
○根城亜希子 / 新荒町附祭若者連
○宮古角洋 / 城下附祭
○類家雅敏 / 柏崎新町附祭

■山車飾り貸し出しにご協力いただいた山車組

○内丸親睦会　○鍛冶町附祭若者連　○下組町山車組
○朔日町附祭　○吉田産業グループ山車組　○十一日町龍組
○糠塚附祭組　○青山会山車組

■協力　はちのへ山車振興会

■参加アーティスト

土谷享 / KOSUGE1-16
住中浩史
北條元康

■制作に参加した市民のみなさん

○相野翔有○アンジェリカ・ワン○安藤りこ○安藤靖彦○池田恵子
○石上大護○伊東遥○今中英利子○今中明愛○今中明絆○今中明陽
○大貝尚永○大貝知衣○大釜弘子○大西亮○大西和奏○大橋麻未
○金入あみ○金入教人○金入悠悟○金入亜希子○金浜友紀
○金浜優真○金浜爽真○川﨑八栄子○川守田大志○北城大地
○北城秀雄○金田一正治○黒坂叶聖○黒坂奈緒子○ケアリン・ロウ
○榊原由季○佐々木智世○佐々木せつ○佐々木夢仁○佐々木結子
○佐藤洋美○佐藤来○澤田馨樹○菅原真心粋○髙沢司○髙沢敦美
○髙杉梨紗○髙杉圭祐○高橋麻衣○髙屋敷美貴○髙屋敷美乃
○武部歓多○舘下悠莉○舘下琉翔○西舘顕翔○西野恵○野添匠
○万谷楓○マシュー・ボラ○松田唯○松田陽子○松村良子
○松村陽一○三浦彩伽○三浦千春○三浦幸枝○山口晶太○山口晶慶
○山田千栞○吉田由紀子○吉田羽琉空○吉田奏風○吉田翔陽
○吉田莉規○吉田琥詠（敬称略）

■運営にご協力いただいたみなさん

○相野翔有○内城和生○三浦光陽○横山みやび○中里美夢
○木村疊生○樋口志保○万谷楓○澤田馨樹○武部歓多○橘鈴茄
○江渡将○田中稔○十日市秀悦○田中勉○青森県立八戸東高等学校
○青森県立八戸商業高等学校○八戸工業高等専門学校

■楽団

鈴木広志 sax　木村仁哉 tuba　大口俊輔 accordion
田中庸介 banjo　チェジェチョル janggu

＜順不同・敬称略＞

■制作した市民のみなさん　72 名
■運営にご協力いただいたみなさん　15 名と 3 校
■制作・運営にご協力いただいた山車組のみなさん　22 名

記録映像制作プロジェクト

縦糸横糸合同会社が、教育プログラムのトライアル授業の映像記録（23 分）、DASHIJIN LAND 映像記録（18 分）を制作した。

今後の山車組の活動にプラスになり、山車人たちの豊かな文化を市民が楽しく体感できるような場を作りたい。そんな願いを込めてDASHIJIN LANDは行われた。

運営に到るまでの制作ワークショップでは、小さな子どもたちも紙やすりやカッターで発泡スチロール彫刻に挑み、忍耐強く作業して完成させていた。

毎晩の制作にも多様な人たちが参加し、まさに本物の山車小屋のようだった。後半になればなるほど、多くの人たちが駆けつけてくれ、いつもとは異なる環境、多様な人との制作を体験した。

山車組のみなさんは、シーズンオフにも関わらず、仕事が終わるとはっちに毎晩集まってくださった。そして組をまたいで、いつもの山車作りでは自身ではやらないような作業にも取り組んでいた。いつもと勝手の違う作業は、いつもの山車作りを振り返ることにもつながった。

住中浩史さん、北條元康さんの的確なアシストで、時間が限られる中、最大限の仕事をしていただけた。

土谷さんは、山車組の方々の思いを尊重しながら、彼らが山車小屋での制作では出会えないような体験のある場を目指して行った。

10数人を乗せた盆を、自転車をこぐことで動かすことができる木製のメリーゴーラウンドはKOSUGE1-16が全国各地で展開して来た優れた仮設遊戯装置である。小学生でも動かすことができるが、2分ほどこぐと、大人でもかなりハードである。そのため、メリーゴーラウンドに乗っている人はこぐ人をねぎらう。そこに気持ちのやりとりが生まれ、見えない絆を紡いでいく。これは、そんなからくりを秘めた装置である。

山車飾りで包まれたメリーゴーラウンドは、乗っても、見ていても、物語の中に入り込んで物語を体験しているように感じられた。そのため、山車の造形を、これまでとは違う視点からじっくりと見つめる機会を創り出し、八戸市民にとっては新鮮な体験となった。

また、土谷さんの発案に、山車組のみなさんがアイディアを出してくださり、発泡スチロール彫刻のチョコバナナやイカ焼き、かき氷、たこ焼きを賞品とする型抜き屋台が生まれた。そこでは、山車組の方たちのみんなを喜ばせたいという思いが発揮された。訪れる市民との交流を楽しむ姿に、常に自ら祭りを楽しもうとする祭り人の心意気を感じた。

メリーゴーラウンドは賑わい、運営に協力してくれた高校生たちや十日市さんの巧みなトークや「八皿の守人」になりきっての案内、楽隊の演奏などで、来場者の体験はさらに大きく膨らんだ。メリーゴーラウンドがまわる約2分間を演出する音楽も、高校生の即興で生まれた。最後の最後まで、プロジェクトは多くの人たちの手で、拡張していった。

祭りは地域の人々の「無償の貢献」のやりとりの上に成り立っている。そのことを、様々な局面で感じさせてくれた。

土谷さんは語っていた。

「祭りは贈与経済の上に成り立っている。どんなに観光客が来ても、山車組の人たちに実入りはない。彼らが活動しやすくなるような地域の贈与経済の新たな仕組みを創り出していく必要があるのではないか。」と。

はっちプロジェクト DASHIJIN

DASHIJINになりきって山車作り体験！

山車組と市民との接点を継続して作り続けていこうと、「DASHIJINなりきりツアー」と題した体験ツアーを開催した。

各山車組では、祭りを控えた忙しい時期にもかかわらず、体験作業のための材料を準備していただき、参加者が山車作りの醍醐味を味わうことができるような受け入れ態勢を作ってくださった。

金メダル風の参加者の名札を作って待っていてくださった山車組もあり、子どもたちは大喜びだった。

子どもたちは作業が行われている山車小屋も見学させてもらい、本物の山車作りの作業体験をさせていただき、心から大満足の時間を過ごした。

参加者たちは、完成した山車の中に、自分が作ったパーツを探し出して、心密かに喜びを感じたに違いない。

▲十一日町龍組で製作予定の山車絵を見せ、テーマを説明する石橋さん

▲山車小屋で行われていた紙貼り作業に飛び入り参加
本物の山車作りに参加できてうれしさいっぱい！

DASHIJIN なりきりツアー

文化庁　beyond 2020　はっち hacchi

平成 31 年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業
主催　八戸市（八戸ポータルミュージアム はっち）
協力　はちのへ山車振興会

八戸三社大祭をささえているのは、27 の山車組に集まる市民たち。
みんなを喜ばせたい、おどろかせたい。そんな思いの市民たちが集まり、
ボランタリーな力で、はなやかでスケールの大きな山車を作りあげていきます。
その心意気とそれをささえる市民パワーは、八戸の誇りです！
祭りを前に、山車組での山車づくりを体験しよう！
DASHIJIN（ダシジン）として過ごす時間の中で、
祭りをささえているみなさんの汗と心意気にふれてください！

開催日程

① 6/16（日）13:30～　② 6/23（日）10:30～
③ 6/30（日）13:30～　④ 7/ 7（日）13:30～
※体験時間：約 1 時間（作業内容により延長する場合あり）

プログラム内容

・体験場所は、各山車組の作業状況をお聞きしながら決定します。集合時間、集合場所については、参加申し込みをいただいた方に個別にご連絡します。体験内容は、各回ごとに異なります。
・申し込み多数の際には、人数を調整させていただく場合があります。
・現地解散となります。
・発泡スチロールや塗料を使いますので、汚れてもよい服でご参加ください。（作業着専門店や DIY センターで売っている使い捨ての不織布のつなぎは安くて機能的です。2～3 着で 500 円程度。）
・飲み物などはご自分でご用意ください。
・活動時にこちらで撮影した写真は広報活動に使用させていただきます。

参加条件

・小学校 3 年生以上 100 歳まで
・小学校 3 年生未満のお子様の見学も歓迎しますが、保護者の同伴をお願いします。
・親子でのご参加、お友達同士でのご参加、大歓迎です。

参加申込み・問合せ

各開催日の 7 日前までに、下記①～⑥を明記の上メール、FAX または電話でお申し込みください。
①参加希望日　②参加者氏名　③年齢または学年
④性別　⑤住所　⑥電話・メールアドレス
申込先：
八戸ポータルミュージアム はっち

はっちプロジェクト DASHIJIN ダシジン
八戸三社大祭の山車組に関わる人々の多彩かつ地道な活動とその驚くべき表現と創造の力を、より多くの人たちと楽しみながら確かめ合う場を創り出し、山車づくりやそれに伴う地域の力を未来へ継承するために育てて行くはっちのプロジェクトです。

DASHIJIN の掟 おきて

一、DASHIJIN は、ボランティアとして活動します。
一、DASHIJIN は、山車を見て喜ぶ人の顔を思いながら、現場での指揮のもと、心をこめて作業します。
一、DASHIJIN にとって、上手下手は関係ありません。ていねいに、根気強くが山車作りのモットーです。
一、DASHIJIN は、自分にまかせられた仕事を責任をもって最後までやりとげます。
　どんな小さな仕事であろうと、それができあがらなければ山車は完成しないのですから。
一、DASHIJIN は、世代も立場も越えて、お互いの仕事を認め合い、尊重し合います。

八戸ポータルミュージアム はっち　〒031-0032 青森県八戸市三日町 11-1　TEL 0178-22-8228　FAX 0178-22-8808
http://hacchi.jp/　E-mail hacchi@city.hachinohe.aomori.jp

山車小屋を実際に訪れ、本物の山車制作を体験。さまざまな工程があるが、実物の山車作りに貢献することで、祭りで披露される山車への関心も倍加した。また、山車小屋で多くの人々と交流し、その技や地道な活動を身をもって体感した。4 日間、10 山車組で開催したワークショップに計 98 名が参加した。

①6/16（日）13:30 ～　〔体験場所〕吉田産業グループ山車組　〔参加人数〕 9 人
〔体験内容〕下塗り・色塗り（下塗り後の発泡彫刻への色塗り）
②6/23（日）10:30 ～　〔体験場所〕十一日町龍組　〔参加人数〕 12 人
〔体験内容〕下塗り・紙貼り
6/23（日）13:30 ～　〔体験場所〕内丸親睦会　〔参加人数〕 11 人
〔体験内容〕下塗り、やすりがけ（型抜きした波・百足の足などにやすりがけ）
③6/30（日）10:30 ～　〔体験場所〕十一日町龍組　〔参加人数〕 18 人
〔体験内容〕蝶々作り（ワイヤーを切って羽の形をつくり、薄紙を貼った）
6/30（日）13:30 ～　〔体験場所〕糠塚附祭組　〔参加人数〕 10 人
〔体験内容〕紙貼り・色塗り（下塗り後の発泡彫刻への色塗り）
6/30（日）13:30 ～　〔体験場所〕十六日町山車組　〔参加人数〕9 人
〔体験内容〕色塗り（下塗り後の発泡彫刻への色塗り）
6/30（日）13:30 ～　〔体験場所〕朔日町附祭　〔参加人数〕 8 人
〔体験内容〕やすりがけ（型抜きした鬼の髪にやすりがけ）　・色塗り（下塗り後の発泡彫刻への色塗り）
④ 7/7（日）13:30 ～　〔体験場所〕吹上山車組　〔参加人数〕 10 人
〔体験内容〕桜の花付け（桜の枝に桜をつけた）
7/7（日）13:30 ～　〔体験場所〕下大工町附祭若者連中・塩町附祭組・新荒町附祭若者連　〔参加人数〕11 人
〔体験内容〕下塗り・色塗り（山車の土台・壁への色塗り）・紙貼り・鬼の植毛（発泡の鬼に枝を髪の毛として差した）

2019 DASHIJIN はっちプロジェクト
未完に終わった「八戸三社大祭スモールワールド」

土谷さんと山車組のみなさんの協働の場について、ミーティングを重ねた。その結果、山車組のみなさんにも、子どもたちにもより多く参加してもらおうと、春休みの運営を目指して制作することとなった。制作するのは、八戸三社大祭の3つの神社をめぐる物語の小さな世界。八幡馬型の足こぎ四輪車でめぐりながら、各所でゲームを楽しむことができる「八戸三社大祭スモールワールド」である。会場のマチニワには、かつて竹と紙で彫刻を作っていたころの山車作りの技を体験するコーナーも作ることを計画した。12月に岩など一部の造形を制作していたが、新型コロナウイルスの非常事態宣言が発出され、残念ながらこの計画は未完となった。

◀山車組のみなさんと練り上げた「八戸三社大祭スモールワールド」のラフスケッチ by 土谷享

▼12月のレジデンス時に、木材や段ボール、蔓などで岩を制作した。

八幡馬型足こぎ四輪車に乗って、八戸三神社のエピソードの世界を各所にちりばめられたゲームをクリアしながらゴールを目指す。イカ釣り、はっち流騎馬打毬、山伏の法霊が飛び込んだ池での雨乞い、ゴールは DASHIJIN の御朱印？
この世界を市民参加で制作し、春休みの遊園地を出現させるというプランだった。

八戸三社大祭に秘められた
数々の宝物を探索する
子どもたちの学びの旅
を支えよう！

2020 はっちプロジェクト DASHIJIN エデュケーション・プロジェクト「総合学習の教材をつくる」

2020年は、集大成の協働作業を行う年度だったが、春に八戸三社大祭の中止が決定され、予定していたプロジェクトの続行は不可能と判断された。

しかし、何か残るものを作成してこのプロジェクトを終えたいということから、KOSUGE1-16の土谷さんのディレクションにより、学校教育で活用できるさまざまな山車飾りのミニチュア教材を制作することにした。27山車組から制作者を選出し、9つのカテゴリーのアイテムを作成していただいた。また、実際の作業風景や、サンプルにできない人形作りなどは、映画監督の大澤未来さんに撮影・構成していただき、授業で活用できる映像8本を制作した。

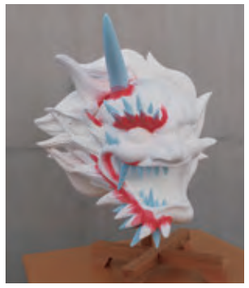
それぞれの造形がどのようなプロセスで作られているかをわかりやすく説明するために、山車組のみなさんに工程毎のサンプルを作成していただいた。四角い発泡スチロールが馬や鬼の彫刻として完成するまでの過程がわかると同時に、どのような道具や工夫が施されているかが、実物と記録映像から手に取るように理解できる内容となっている。

プロジェクト・ディレクターの吉川がこの教材を活用した授業指導案を作成し、「山車作りのヒミツ」と題したハンドブックを制作し、先生方への説明会も行った。このサンプル教材と映像、授業用ハンドブック、パワーポイントデータや資料・ワークシートのデータを、八戸市教育委員会に提供し、先生方の授業でご活用いただく。

これらのサンプルを安全に持ち運べるように、土谷さんがそれぞの作品にフィットする箱を作成してくれた。この箱が、学校間を盛んに行き来し、子どもたちの学習に役立つことを願ってやまない。

ミニチュアサンプルは下記の小学校で、それぞれ保管されている。

鬼……城北小学校
馬……柏崎小学校
金具……八戸小学校
波……江陽小学校
岩……吹上小学校
龍の彫刻……白山台小学校
鎧……長者小学校
チョコバナナ…西白山台小学校



▲鬼の発泡スチロール彫刻を作る過程をわかりやすく表した。

▲先生方の授業にご活用いただく「総合学習ハンドブック」

「八戸三社大祭　山車作りのヒミツ」と題した授業は、小学校中学年を対象に組み立てた。

八戸における祭りの起源を考え、この祭りの最大の特徴とも言える「附祭」に着目しながら、授業は進行する。江戸時代には人形だけをのせた人形山車だった「附祭」が、明治時代の中頃には、地域住民の手に制作が委ねられるようになり、住民たちが楽しめる華やかな表現と演出の「風流山車」の様式が確立された歴史を学ぶ。地域住民が自治的、互助的精神のもと力を合わせて山車作りを行い、地域社会の人々がさまざまな形でこの山車祭りを支えている伝統が、八戸の山車祭りの特筆すべき特徴であることを子どもたちにも理解してほしいと願っている。

山車組の活動は、地域の人が世代や立場を超えて寄り合える、コミュニティ形成において意義深い場であること、さらにはそれが誰にでも開かれた場であること、祭りを支える参加の仕方はさまざまな形があることを、ご指導いただく先生方や保護者のみなさんにもご理解いただき、華やかな山車行列を支えている目に見えないものを見ようとする視点を、子どもたちに養ってほしい。

このハンドブックに掲載した資料や、造形の製作過程が手に取るようにわかる山車組のみなさんが制作してくださったミニチュアサンプルをご活用いただき、八戸三社大祭を未来に継承していく力が八戸の子どもたちに育まれていくことを願ってやまない。

▲教材披露内覧会

▲先生方への授業案説明会

「山車作りのヒミツ」授業概要

対象：3・4年生
授業時数：2校時または4校時

2020年度

○授業のねらい

八戸三社大祭の祭り行列はもともと何のために行われてきたのか、大きく華やかな山車はなぜ作られるのか、山車がだれの手でどのように作られるのかを知り、ふるさとの祭りに込められた人々の思いに触れる。
山車を飾るさまざまな彫刻や人形、パーツ作りの技や知恵を知り、市民の手で創られる山車祭りのすばらしさを再発見する。

○授業の流れ

導入

話し合い

- **祭り行列の観察**
  →この行列は何のために行われているのか？
- **法霊の伝説を聞く**
  →祭りに込められた人々の思いを話し合う
- **附祭＝山車**
  →神輿渡御行列に加わった市民主体の附祭が、華やかな「山車」として発達していった歴史を知る
  →八戸三社大祭は国の重要無形民俗文化財、ユネスコ無形文化遺産登録
- **山車作りのヒミツ 1…八戸三社大祭の山車は「風流山車」**
  →趣向を凝らして人々を楽しませようという山車に込められた思いを知る
- **まちの人々と山車との関係を知る**
  →商家や大店から始まった「出し」が、消防組を中心とした活動に移り、やがて市民参加の現在の形になったことを知る
- **山車作りのヒミツ 2…毎年山車が作り変えられる**
- **山車作りのヒミツ 3…住民たちが山車を作る**
  →だれがどこで、山車を作っているかを知る
  →山車作りの場はだれもが参加できる開かれた場であることを知る
- **山車作りのヒミツ 4…住民たちがさまざまなやり方で山車作りを支えている**
  →まちの人たちが自治的に山車作りを支えていることに気づく

展開

観　察　**話し合い**

- **山車と山車飾りの観察**
  →山車にどのようなものがどのように飾られているか？
  →昔の山車飾りの材料を知る
  →山車組の人たちが実際に作った彫刻や装飾が、どのように作られているか観察し、気づいたことを話し合う
  →人形や衣装作り、仕掛けなどの映像を見て気づいたことを話し合う
  →山車作りの工程を知る

まとめ

- **山車作りのヒミツ 5…新しい知恵や材料を常に取り入れながら作られている**
  →変化をおそれずに進化を目指すことが八戸の山車作りの心意気
- **山車作りのヒミツ 6…お年寄りから子どもまでみんなで楽しみながら作る場**
  →お年寄りから子どもまでが一緒に作る場は地域の人たちの心と心を結ぶ
  →市民みんなが楽しみながら山車を作る八戸の伝統は、未来に伝えたい宝物　＜ここまで2校時＞

実習

＜図工に発展させる場合＞　＜実習は2校時＞

- **発泡スチロールで「チョコバナナ」を作ってみよう**
  →本物そっくりにバナナの形を削りだし、着色して仕上げてみる。
- **あるいは実際の山車のパーツ作りを手伝う。**
  ※山車組に相談して実際に山車のどこかにつく部品を作る。

＜準備教材＞

＊祭り行列の絵図
＊映像
＊ワークシート（P19）

＊法霊伝説
＊飢饉の絵図
＊映像

＊屯所・山車小屋の写真
＊支えている人たちの写真

＊山車の写真
＊昔の山車の写真

＊実物のミニチュア（プロセス）
＊記録映像

＊バナナの面取りをした発泡スチロールブロック
＊割りばし　＊ビーズ　＊塗料・筆
＊塗料用バケツ　＊カッター　＊紙やすり
＊防護服などの作業着
（P18 参照）

山車のパーツ教材一覧

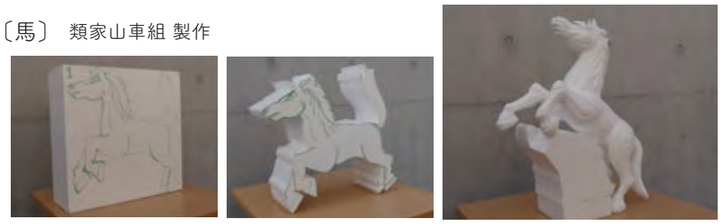
※実際には2m以上の大きさになることもある彫刻などを、持ち運びしやすいミニチュアサイズで製作していただいた。

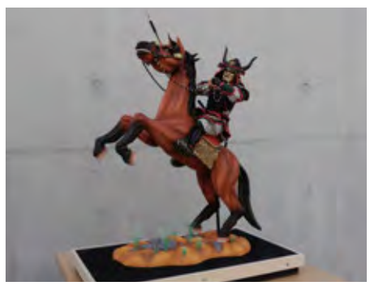
〔岩～竹〕 鍛冶町附祭若者連 製作

〔岩～段ボール〕 六日町附祭若者連 製作

※岩から流れ落ちる水は、ひも状のスポンジを貼って表している。

〔馬〕 類家山車組 製作





※馬ができる工程を見せるためのミニチュアでしたが山車組の方が武者も発泡スチロールで作って、馬に乗せてくれました。

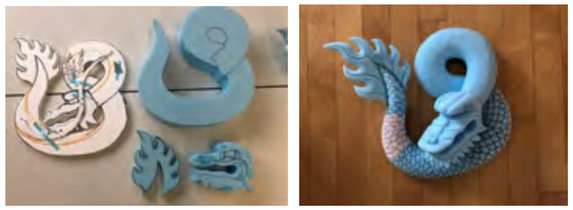
〔鬼〕 朔日町附祭 製作

山車組のみなさんが製作した山車造形のプロセスがわかる教材用ミニチュアの彫刻

〔波～ベニヤ〕
下組町山車組 製作

〔波～発泡スチロール〕
下組町山車組 製作

〔龍〕 白山台山車組 製作



〔実習～チョコバナナ〕
内丸親睦会 製作

〔錺（かざり）金具〕 内丸親睦会 製作

〔鎧〕 新荒町附祭若者連 製作

▲教材披露内覧会に集まった山車組のみなさんと土谷さん（左端）大澤さん（左から２番目）

「箱と少年」

土谷 享（KOSUGE1-16 代表 ）

人は集う事が喜びであるが、コロナ禍においては集いは避けるべき行いとなる。

今年度の八戸三社大祭は中止だった。太平洋戦争時以来とのこと。山車作りとは、山車を作るというだけのことなのか。その答えは半分はYes. 一方ではNot only yes. だろう。八戸三社大祭の山車を作るという行いに、どれだけの時間の層が重なり、どれだけの手数が重なり、どれだけの創造力が発揮されているのか想像してみよう。今回の教材作りはその様な考えからスタートした。

参加してくれた山車人の多くはａｒｏｕｎｄ40。彼らが少年時代の頃には中心市街地には7軒、少し自転車で足を伸ばせば16軒の山車小屋があったという。今回、鬼の頭部を製作してくれた朔日町の中居林義直さんは中学生の頃、山車作りに参加していて先輩に波型の取り付け方法を聞いたら「教えてやるから付いて来い」と言われて、近くの波が上手な、しかしライバルであるはずの山車小屋に連れて行かれ「ここでよく見ておきなさい」と置いていかれたというユニークなエピソードを語ってくれた。また、波板の教材を製作してくれた下組町山車組の市澤伸乃佑さんは、20年ほど前までは双眼鏡を持って各山車組の製作を覗きに回っていたそうだ。ある日、内丸の山車小屋の製作の様子を車の影から覗いていると、内丸親睦会の下山豊会長に「おい、こら、まて！」と追いかけられて捕まり、「見せてやるからコソコソするな」と嗜められたという。強面のお兄さんに追いかけられてさぞかし怖かっただろうということは想像にかたく無い。毎年夏になると、勇壮な巨大風流山車が27台も練り歩く。一度虜になれば、少年の憧れの対象になるということは、私も凄く理解できる。夏が近づくにつれて町内の山車小屋のボルテージも上がっていく。私も「当時の」この街に育ちたかった。本当に羨ましい。

さて、現在では山車小屋は大人の事情で続々と郊外に追いやられ、町内に山車小屋がある事は少なくなりつつある。現在の「少年」達からは遠い存在となってしまっただろう。そこで、八戸三社大祭山車組ならではの地域資源である自立共生型のコミュニティの大切さを理解しようという事で、ＤＡＳＨＩＪＩＮＰＲＯＪＥＣＴではもう一度「少年」の心を持つ人達に山車小屋文化を近づける試みを行ってきた。一昨年のＤＡＳＨＩＪＩＮＬＡＮＤ、昨年度は残念ながらコロナ禍の影響で中止になったがＤＡＳＨＩＪＩＮＬＡＮＤ２～八戸三社大祭スモールワールド、そして今年度の学校教材化プロジェクトに取り組んできた。ＤＡＳＨＩＪＩＮＬＡＮＤは移動式遊園地の様な企画なので、密集密接は避けられず、コロナ禍においてはハードルが高い。集う事が許されないｗｉｔｈコロナの社会状況としては何が出来るか、今年度に入ってから吉川ディレクターとも繰り返し議論してきた。それが学校教材化プロジェクトとなった。近年、八戸三社大祭の山車組の多くが製作責任者をはじめとする世代交代が活発になっている事もあり、若い世代にバトンが渡され始めている。これが良い競い合いになり山車の造形はこれまでにも増して活気がある。今回の企画で現在の山車作りのある種のピークをコレクション出来たことは八戸の文化財としても重要な資料となる筈だ。また、これは単なる造形の教材では無い。子供たちの身近な素材で作られている事、作っている人たちはプロでは無い事、そして何より生き生きと作っている事を感じ取れるのではないか。彼らは普段の生活から山車に使えそうなものを発見してくる。年寄りになっても新しいものを発見してくる。これを山車人たちは「お祭り目」というそうだ。「アナロジー」に近い、また は同じ思考だ。アナロジー思考は学者や研究者には必須な視点である。その様な思考回路を日常的に使っている人々が街の中に沢山いるということは面白すぎる。こういった工夫や知恵に子供の頃から接することの出来る豊かさに是非とも気付いて欲しい。

そして最後に。約10年間八戸にプロジェクトを通して関わりを持ってきた私の視点から感じることだが、大規模な「箱」作りが益々活発化している八戸市の内部においてはその表層とは裏腹に、八戸ボータルミュージアムに滞在しているだけでも、する、見る、支えるという関係性の形骸化を感じてしまう。だからこそ、生き生きした still life な八戸文化を大切にして欲しい。そして、人を大切にしてほしい。もう一度、目を覚まして欲しい。消失や忘却はいつのまにか訪れる。しかし、消失しないようにする事、忘却しない様にする事は、とても面倒な事だ。でも面倒なことを避け続けてはいけない。

そんな想いを込めて今回集まった沢山の生き生きした作品の為に手作りの「箱」をひたすら作り、八戸を後にします。これは優れた中身のある箱です。また、パンドラの箱ではありませんので怖がらないでください。ある意味では公共の箱ものですが、いつでも子供たちのために開けてください。大切なものが入ってますが、入っているものよりも開けることの方が実は大切です。うっかり壊れても全然大丈夫です。中身は腐りませんが、開けないとある意味で腐ります。よろしくお願いします。

アーティスト・プロフィール

KOSUGE1-16

KOSUGE1-16 は 2001 年より車田智志乃と土谷享の美術家ユニットとして活動を開始。現在はこれまでの活動コンセプトを引き継ぎ、土谷享が代表して活動している。日常のありふれた環境や、現象、人のつながりから作品を生み出している。作品を仲立ちにして、鑑賞者が参加者になり、参加者同士、あるいは作品と参加者の間に「もちつもたれつ」という関係性を創り出す。身近な場所で、アートが生活を豊かにするという実感を、多くの人たちと共有している。「どんどこ！巨大紙相撲」は全国各地に引き継がれており、コロナ禍でも，東京都墨田区では地域社会を巻きこんでオンライン開催の試みが行われている。現在、高知在住。国内外でプロジェクトやワークショップを行っている。

2008 年、第 11 回岡本太郎現代美術賞 岡本太郎賞受賞。はっちでは、2013 年「はっち流騎馬打毬」を開催。2018 年から DASHIJIN に参加。

動く仕掛け

倉庫や市場で活躍しているフォークリフトが重い荷物を持ち上げるのと同じ仕組みで、山車の動く仕掛けはできている。

フォークリフトと同じ仕掛けで、人形や彫刻が迫り上げる。

このような動く仕掛けによって、人形や彫刻がダイナミックにせり上がり、沿道の人々を楽しませている。

▲山車が迫り上がる仕掛けは、フォークリフトに例えて、わかりやすく解説している。

なぜ祭りをやるのか？を問い続ける

大澤 未来

東日本大震災の翌年にご縁をいただいて、はっち流騎馬打毬プロジェクトに映像作家として参加させていただいた。三社大祭の中日に長者山新羅神社で奉納される騎馬打毬をモチーフにした「手作りロボットコンテスト」をKOSUGE1-16が企画し、私は騎馬打毬に登場する馬たちと人間たちが、日常生活で何を仲立ちにしながらコミュニケーションをとっているかに注目した「馬と人間」という映像作品を発表した。

そこでの気付きを元に、同じ南部藩沿岸部を広範囲にわたって巡業する黒森神楽衆と地域の人々、魚と動物、民話と大津波の歴史を混在させた「廻り神楽」という長編ドキュメンタリー映画を2017年に完成させた。

今回、コロナ禍の世界の只中で、久しぶりに三社大祭の山車とそれに関わる人々に着目したDASH IJINプロジェクトに呼んでいただいた時、自分がグルっと円を描いて8年ぶりに八戸に戻ってきた鮭のような、不思議な感覚があった。

そんなわけで、騎馬打毬プロジェクトの時には深く関係する機会を持てなかった山車組の人たちと映像を介して繋がる事になった。

「山車の様々な部分がどのように作られているか？」また「どんな姿形をした人によって作られているか？」はたまた「これだけ大がかりな山車を真剣におもしろがって作る大人がなんでいるのか？」など、次々と湧き上がる謎を小学生と共有する教材として、DASHIJINの教材は作られた。

この謎に迫るため、私はそれぞれの制作者が手を動かしている瞬間に、わざと様々な質問を投げかける事にした。「何がコツなのか？」「何をイメージしながら作っているのか？」など、実際に手を動かしている瞬間だからこそ話してくれる言葉を丁寧に拾い集めて、よくある第三者が後から付けたナレーションの映像教材とは別な、制作者の実感が語られる教材にしようとしたのだ。

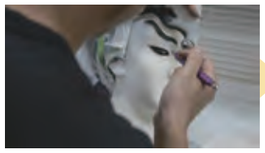
その成果は、この映像と縮小され制作工程が分かりやすいように作られた物たちを見ながら、先生たちや子供たちが、そこから何を感じ取ってくれるかに委ねられている。そこには「祭ってなんでやってるの？」という、もうひとつの大きな謎が横たわっている。

アーティスト・プロフィール

大澤未来

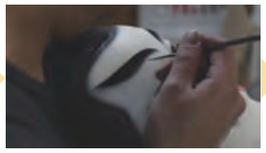
映像作家、映画監督。民俗学、人類学をベースに「生き物、自然、宗教と人間との関係性」に注目した作品を発表している。映しだされる映像と音の中から、人間中心の見方を広げて世界を実感できる作品を生み出している。青森県八戸市では「はっち流騎馬打毬」のプロジェクトにおいて、騎馬打毬に登場する馬たちと、その馬を育てる人々との日常的なコミュニケーションと八戸周辺の馬文化に注目した３面インスタレーション映像作品「馬と人間」を 2013 年に発表している。2017 年に監督した長編映画「廻り神楽」が国内最古の毎日映画コンクールでドキュメンタリー映画の最高賞を受賞。その後、海外でも上映が行われている。また、国内の大学で映像制作に関する授業なども行っている。近年は第二次大戦期に日本と上海に滞在したホロコーストを逃れたユダヤ人の映画を制作中。

人形の頭を作る



白く塗りつぶした人形の顔にエアブラシで目や眉毛などを描く。

筆で睫毛を１本ずつ描く。

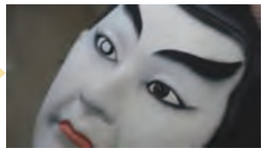


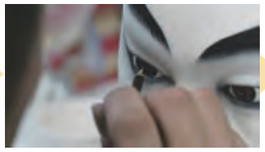
眉毛も生え際を１本ずつ描く。

唇を塗る。

白目を塗る。

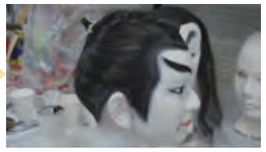
黒目を描く。





目の中の虹彩や光など、細かい部分をていねいに描く。

髪の毛の束を生え際からつけ、釘でとめる。



▲サンプルが提供できない、人形の顔の作り方や衣装作りと着付け方などは映像に記録し教材映像として制作

▼映像では、各造形物を作る際のさまざまな知恵や技を見ることができる

＜教材映像リスト＞　01 祭り行列のはじまり　02 山車について　03 岩を作る
04 馬を作る　05 金具を作る　06 人形の顔
07 人形の衣装　08 鎧を作る
09 山車の動く仕掛け 10 花を作る

岩を塗る

全体を白で塗る。エアブラシを使ってまんべんなく色をつける。
※苔の緑色をあざやかに見せるために下塗りをする。

苔の緑色をところどころに塗る。

苔の部分を残して岩の茶色を塗る。

さらに一段暗い茶色を重ねて塗る。
※昔は墨で黒く塗っていたこともあり、八戸の山車の岩は黒っぽい。

おがくず（木くず）に緑色の塗料と木工ボンドを入れて混ぜ、苔を作る。

岩に投げつけながら、苔を岩につけていく。

投げて貼ることで、苔が飛び散り、苔が自然に生えている感じが出る。

完成。

作る場が地域社会を育てる～DASHIJINの5年を振り返って

プロジェクト・ディレクター　吉川由美

手を動かして、ものを作ることは楽しい。自分のものを作るのも楽しいけれど、だれのものでもないようなものをみんなで作るのはまた格別に楽しい。

山車小屋に行ってみると、それが何かわからないようなパーツをいくつもいくつも作ることになる。何を創っているのかわからなくても、それはそれでなぜか楽しい。

山車小屋に入るまでは、仕事のこととか家のこととか、雑事に追われまくって焦っている心も、手を動かしているうちに、みんなが黙々と何かを作っている空気の中で、浮き足立っている心が鎮まっていくのだ。

ある日、内丸親睦会にお手伝いに行ってみると、その日は小さな菊の葉っぱを作るように言われた。師匠は近所の若い床屋さんだった。長い間、八戸の外で仕事していたが、Uターンしたという。人付き合いのきっかけがなかったが、山車組に来てみたらすぐに地域の一員になれたと言っていた。手先が器用な彼は、カッター捌きもあざやかに、菊作りを教えてくれた。

ものを作る場って、すごい。普段なら世代だとかキャリアだとか、なんだかんだ面倒なバリアが人と人を遠ざけるが、山車組の中では、ものを作るというただ一点に向かって、人の関係も限りなくフラットだ。若い人が年配者に教えたり、子どもたちがいることで大人は大人になろうとする。内丸親睦会では、高校生も女性たちも若者たちもおじさんたちも長老たちもベテランも新参者も、みんながそれぞれに任せられた仕事に懸命に取り組んでいて、それはさわやかなまでに並列で、どの人の成果もちゃんと受け止められる。そのことに、私はめちゃくちゃ感動したのだった。そういう空気を醸し出しているのは、全体を俯瞰して見ていて、必要な時にそっとサポートしてくれるリーダーなのかもしれない。山車小屋に集まるすべての人を受け入れ、認めてくれる場の懐の深さに、私は魅了された。互いにリスペクトし合う場でこそ、人は安心して生きられる。そんなことを改めて発見させられた。

そして、驚くべきことに、どの山車小屋を訪ねても、そのあたたかい懐があった。ここで、人は利他の心を育んでいる。寛容さを身に付けていく。根気強さを養う。多様な価値観を知る。世代を超えたつきあいの良さを味わう。大人になる。若々しくなる。自分に向き合い自らと対話する。自分を肯定し誇りを持つことができる。作る場で、人は成長できる！それを見せていただいた気がした。だからこそ、この祭りは規模が拡大しても形骸化せず、その魂を失わずに祭りらしい祭りの形を保っているのかもしれない。

山車人たちの営みには、作る場を持続していくためのOSが組み込まれているのではないかと考えるようになった。そして、この場を陰で支える人たちの多様さ、数の多さにも驚かされた。

山車祭りを継承することで紡がれている、このような目に見えない社会的な資産は、何かと生きづらい社会をどう生きればいいのかということにたくさんのヒントを与えてくれる。

八戸市民は、この祭りをあまりにも一元的な視点からしか見ていないのではないか。この祭りを支えている当事者が、それを支えていることのすばらしい価値に気づいていないのではないか。そんな思いが、山車小屋に通う度に深くなった。

なんとかこの価値を市民のみなさんに広く体感してもらえるような場ができないかと、リサーチを経て考えるようになった。始めは造形的な関心が大半を占めていたが、そのことよりも「作る場」が地域社会にもたらしているさまざまな価値を再発見してもらうことの方が、将来の祭りの継承にとっても、ずっと大切なことなのではないかと思うようになったのだ。

このような再発見の旅に私たちを導いてくれたアーティストの住中浩史さんや縦糸横糸合同会社の小岩さん、山田さん、三塚さんには心から感謝申し上げたい。

そして、価値の再発見へと市民をいざなうために「DASHIJINLAND」を始めとする場を創り出してくれたKOSUGE1-16の土谷享さんに心から敬意を払いたい。山車組のみなさんは「山車」の台車という制約から離れて、自転車動力のメリーゴーラウンドを、物語の世界を体感できる造形にするために、いつもとは異なる発想を迫られた。山車組の枠を超えた山車人の協働と、土谷さん、住中さん、北條さんという異質なコンテキストでもの作りを行う人たちとの協働が交差する場で、山車人たちがそれぞれにいつもは考えることのないことを考えたりしていたならうれしい。土谷さんとのぶつかり合いを通して、山車人たちも八戸の山車の様式や自らのこだわりや山車造形の本質について、再度見つめる機会となっていたらうれしい。

土谷さんが構想した仮設遊園地では、多くの市民が発泡スチロール板の型抜きなどの作業を体験し、その出来映えを一見強面の親方たちに認めてもらえる喜びを味わった。小学生が大人たちを乗せたメリーゴーラウンドを回して楽しませ、人に喜んでもらえる喜びと自信を獲得した。土谷さんは、多様な人たちの関わり合いの場をきめ細かい心遣いで創り出し、山車小屋に存在している見えにくい世界を可視化し、体感させ、拡張してくれた。

山車組のみなさんには、オフシーズンに祭り本番以上の労力を費やしていただいた。組を超えて集まってくださったみなさん、何かと相談に乗っていただいたはちのへ山車振興会のみなさんに、心から御礼を申し上げたい。

この取り組みから生まれた教育プログラムが教育委員会に引き継がれる。八戸三社大祭を支えている市民のさまざまな力を学ぶというこれまでとは異なる視点のお祭り教育が、八戸市の子どもたちに行われていくことを願う。

多くの市民が「支えている」ことを誇るようになったとき、さまざまな困難を乗り越えて、祭りは地域社会の人々と心を共にしながら、魂のこもった形で未来に引き継がれていくだろうと思う。

このプロジェクトを通して、山車組のみなさんも自らを「山車人」と呼ぶようになっていった。それは、間違いなくこのプロジェクトの成果のひとつである。

山車小屋というすぐれたOSを、はっちも大いに学びたい。市民にとってはっちが成長の場であり続けるためには、運営する人の居住まいや目線の持ち方こそ大切だ。いい風が吹き抜けていくような、フラットでクリエイティブな場を、私たちも負けずに創り出していきたい。

はっちプロジェクト DASHIJIN

5年間このプロジェクトに
ご参加、ご協力いただいたたくさんの皆様
ありがとうございました！

八戸ポータルミュージアム はっち